

古希を超えて

—九大「にくしん会」記念文集—



NIKUSINKAI 2006



伊都キャンパスを南側上空より望む



新キャンパス：工学系研究教育棟Ⅱ・Ⅲ、実験研究棟 2004.11



旧法・文・経済学部本館



にくしん会百回記念に寄せて

九大にくしん会百回目の開催をお祝い申し上げます。

昭和二十九年に本学を卒業され、長い年月を経てもなお学友と交流を続けられていることに深い感謝をおぼえます。

九州大学においては、来年四月に迫った法人化を見据え、様々な取り組みを進めておりますが、そのなかでも同窓会との連携を強化することは極めて重要なものと考えています。

現在、東京地区における全学同窓会の設立に向け準備がなされておりますが、この東京地区全学同窓会の活発な活動を基盤として、世界最高水準の教育研究拠点を目指して参る所存でございます。皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたしますと同時に、九大にくしん会の更なる発展をお祈りいたします。

平成十五年三月十二日

九州大学総長 梶山千里

九大「にくしん会」の生い立ち

星山芳幸

私達は九大を卒業してから昨年は丁度50年目にあたり、又「にくしん会」は昨年の3月例会で100回目を迎えることが出来ました。

当初はこんなに永く続くとは思いませんでした。歴代の会長(代表幹事)(註①)を初め会員の皆様の並々ならぬ「にくしん会」への情熱が今日まで続けてこられた原動力だと思います。

設立発起人の一人として大変嬉しく思います。と同時に会員の皆様へ心から感謝し厚くお礼申し上げます。ことの始まりは、私が三菱信託銀行の上野支店勤務の頃(昭和53年春)当時山一證券の研修部長をしていた野崎さんと、一杯やりながら、第一分校時代の「岩田屋アルバイト」仲間が集まろう」ということで始まったものです。

野崎さんの鹿児島関係者・私の筑紫丘高校出身者が中心となり各人の友人に声をかけ、昭和53年6月16日の夜、第一回の会合を学士会館で開催しました。参加者は11名(註②)「入会資格」は学部を問わず昭和29年卒及び昭和25年入学(高校の同期生)とし、公私に拘らずお互いの情報を持ちより「肉親」のように助け合ったいこうと誓った。その「肉親」と29年の語呂を合わせて「にくしん会」と名付けた。

例会は、年に4回、3月、6月、9月、12月と決め、常任幹事は野村さん(初代会長)をお願いした。

その後、回を重ねるたびに会員も増えピーク時には、在京同期生約300名の14に当たる70名近くにもなったことがある。前述の100回例会は第1回と同じ学士会館で開催、梶山総長の祝電も頂き多数の参加で盛況でした。

会の運営で一番苦勞した会場の選定も、伊岐さんの提案とお世話で今の「スエヒロ」に決まり、予約不要の為、出欠の確認の手間もはぶけ、幹事は大変楽になった。私は、昨年村井さんから代表幹事を引き継ぐことになりました。

「慶大では卒業後50年目の同窓生を対象に塾長の招待パーティがある」との情報を通さんから得たので、早速、梶山九大総長へお知らせしたところ、今年から開学記念日(5月11日)に実施して頂くことになった。又「九大東京同窓会」の初の「ゴルフコンペ」については城戸さん(幹事・九球会)に大変お世話になりました。

最後に、前杉岡九大総長との出会いで「九大東京同窓会」を立ち上げるについて「にくしん会」を中核におねがいしたい、との要請に会員の皆様のご協力を賜り有難うございました。この紙面を借りて心からお礼申し上げます。

註①

初代会長野村さん(2) 星子さん(3) 寺田さん(4) 松田さん(5)
長さん(6) 栗田さん(7) 村井さん(8) 星山

註②

- 木村安宏(福岡製紙(取) 資材部長)
- 村井忠夫(住宅金融公庫 東京住宅センター 住宅相談室長)
- 横小路健次(三井東庄 海外部次長)
- 佐藤貞夫(新日本証券 新日本投資顧問出向 運用担当部長)
- 深田良亮(防衛施設庁 総務部課長補佐)
- 毛利芳明(丸株 営業部次長)
- 川崎 靖(日本証券金融 企画室次長)
- 山浦可喜(積水化学 受託事業本部 ハイム資材部長)
- 野村徳夫(ロータス参与+三和銀行より出向中)
- 星山芳幸(三菱信託 本店 不動産部次長)
- 野崎清博(山一証券 研修部部長)

(名簿作成は野崎さん)

目次

にくしん会百回記念に寄せて……………	梶山千里……………	3
九大「にくしん会」の生い立ち……………	星山芳幸……………	4
ボケ防止に川柳……………	安西 彰……………	8
岩田屋物語……………	伊岐和男……………	8
2人からの勉強……………	岡 哲……………	10
付きの話……………	長 利雄……………	11
ブラジルでの思い出……………	鬼木正敏……………	12
買占め物語……………	川崎 靖……………	14
「にくしん会」との出会い……………	吉瀬洋助……………	16
初めての同窓会コンペ……………	城戸昭良……………	17
何故アイルランドだったの?……………	久保正明……………	19
2005年夏……………	隈 健……………	21
矢部線プロ野球軍団―素敵な仲間たち―……………	古賀一弘……………	23
雑感三題……………	境 隆清……………	25
電 話 昭和56年秋……………	坂口重幸……………	27
往時茫茫……………	佐藤貞夫……………	28

箱崎での三年間……………	清水昭俊……………	30
九大にくしん会の友人たち……………	下楠園 博……………	31
海外こぼれ話……………	城崎陸郎……………	34
思い出いろいろ……………	辻 昌美……………	36
リタイヤー10年……………	野崎清博……………	38
九大マンドリンクラブの思い出……………	濱地勝太郎……………	40
第3分校時代の思い出……………	林田守生……………	41
墓参偶感……………	深田良亮……………	42
アルバイト物語……………	藤井 洸……………	43
私の歩き遍路……………	藤井潤一……………	44
ベル―出張の思い出―親孝行の少女に感動―星子昭磨……………	星山芳幸……………	47
私の「九大物語」……………	星山芳幸……………	48
私の学生時代……………	松田健三郎……………	51
中国で六年半も日本語教師を務める……………	光吉正邦……………	52
筆跡が乱れた一通の手紙……………	村井忠夫……………	56
インドネシアの歌を唄う会……………	山浦よしのぶ……………	57
73歳で初めての入院手術体験……………	山田 稔……………	59
アルバイトに明け暮れた学生生活……………	渡邊寛之……………	60
会員名簿……………	……………	62
あとがき……………	川崎 靖……………	63



ボケ防止に川柳

安西 彰

川柳でもやってみるか粗大ゴミ(無題)

子育ては男がやれと言う女傑(怖い)

玉二つ下げて大地にすくと立つ(玉)

柔い手を両の手で包み込む(握手)

何よりもみんな元気で年を越え(めでたい)

あちこちで背筋の寒くなる手抜き(寒い)

安全もリストラをする履き違い(リストラ)

宗教と文化を分ける深い河(川)

暗闇にムンクの叫び北の空(空)

志挫けきつめたなごころする掌(志)

ボケ防止に良いだろうと言うことで、近くの公民館に出掛けてから六年になる。

一向に巧くならないが、同好の十四、五名の仲間が変わりなく続いているのは、それなりの魅力があるからであろう。

俳句は花鳥風月を詩い、川柳は人間の生活を詠むといった分

乗っていて3ツ目だった。岩田屋の食堂では、旗が立ったお子様ランチやお子様寿司が定番だったと思う。

警固小学校に昭和12年に入学したあとは、支那事変を始めとして段々戦時体制に入って行き岩田屋の中で、防空大演習の大々的な展示場が設けられたことを記憶している。ガスマスクには、管のついた高級品と薬の入った器具が直結しているものがあつた。

昭和20年の敗戦後は、売る商品がなく4階以上は貸事務所になつていて福岡通産局が最大のテナントだった。

昭和23年中学修猷館を卒業し、旧制福岡高校に進学したが父の会社はマッカーサーの命令で解散させられたので家計はギリギリだったので早速アルバイトを開始した。アルバイトは、アイスキャンデー売りで1本10円仕入れは7円であつた。岩田屋の中の通産局の人々が上得意だった。

にくしん会は岩田屋でアルバイトをした人達の集まりが母体と聞いているが、昭和25年以降のことと思われ岩田屋が雇用主だから立派なものだ。昭和29年九大法学部を卒業、神戸銀行に入行神戸市内店で働いていると福岡支店開設となり帰福8月が開店だった。昭和33年修猷館の同級生河野昭修君がファーストで活躍していた西鉄ライオンズが全国制覇して、岩田屋前をオープンカーで紙吹雪を浴びた翌年34年12月に東京支店に転勤になり上京するまで本当に色々な用事で岩田屋に出入りした。

昭和30年には、岩田屋の中にあつた結婚式場で結婚した。仲

け方もあるが、俳句が季語や表現に制約があるのに対して川柳は五七五であれば何でもありと言うのがいい。時事川柳、サラリーマン川柳、駄洒落川柳と実に幅広い。

五七五十七文字を出来るだけ短い字数で詠んだものに、例えば川上三太郎(大正時代の代表的作句家)の「ひまがえる 汝性来忘者」の六字のものがあるが、まだ五字以下の句にはお目に掛かったことがない。そういう意味で最後の句、「志挫け……」は自慢の作である。

諸兄も挑戦してみても如何。



岩田屋物語

伊岐 和男

私にとっての福岡の原風景には岩田屋が入っている。

昭和11年、出来たばかりの岩田屋の横に着物を着た母と7才の私がいてビル風に吹かれている。我が家は朝倉郡甘木町から西警固に引っ越してきたばかりだった。父の勤め先の大日本航空が、それ迄の太刀洗飛行場から雁ノ巣へと移転したのである。福岡には、中洲の玉屋と橋口町の松屋があつたが市の発展に伴い当時としては珍しいターミナルデパートとして開業したのである。

西警固からは福博電車の赤坂門から天神町まで大名町万町と

人は経済法ゼミの高田源清先生ご夫妻にお願いした。

福岡女子大当時、岩田屋で売り子のアルバイトをしたという妻にとつても馴染みのところだった訳だが、売り子には男子学生はいなかったと言う。

星山君たちはどこで働いていたのだろう。

昭和33年新入行員として九大卒の吉増良介君が配属されてきて、「兄が田代さんと旧制高校の同級ですが」と言う。(田代は伊岐の旧姓)知るも知らぬもない。吉増浩君は福岡中学から旧制福高に来たのだが九大卒業後岩田屋に入社した人物である。

それだけではない。昭和20年6月19日の福岡大空襲で焼け出された我が家は戦後警固小学校近くの薬院原ノ町に仮寓していたが、お向かいの修猷館出身の歯科医角暢氏のミッション卒のお嬢さんが吉増君の奥さんなのである。

戦後、女性が一番佳い職場はデパートだったと思う。その後銀行が好まれる時代が来た。

角洋子さんは岩田屋に勤めていて、エリート吉増浩君の妻となつた。吉増君は西新岩田屋の社長をやり岩田屋専務取締役で退任した。

現在、吉増君は旧制福高同窓会青陵会の代表幹事、私は東京青陵会の代表幹事でありご縁が続いている。

さて十年以上前のこと、警固小学校の同窓会が東京で急に開かれた。

何でも、九大卒業後岩田屋に勤務されていた参議院議員三重

野榮子(しげこ)さんが再選されたのを機にとのことだった。

三重野さんは、星山君らアルバイト学生に給料を支払う係りだったとのことだから面白い。

同窓会には米倉齊加年氏も出席したが、同氏夫人となった上野テルミさんの親族の方が岩田屋の重役だったと星山君は言う。下って平成16年、岩田屋は西南の方向の新しい店に引越し、旧店舗は住宅関係の展示場になっていた。私の人生を様々に彩ってくれた岩田屋の建物の前に私は行んだ。

昭和11年に母と浴びたビル風は、未来の夢を沢山もった風だったが、人生の終盤を意識しはじめた私には無機質の風が吹いているように思われた。



2人からの勉強

岡 哲

ゼネコン勤務で川崎営業所長時代のお話です。川崎市が横に長く、車で全現場を見てまわると、1日があつという間に終わってました。

松下電器の子会社の社長と、1日に1回は会っていましたが、「今日は会議中なので挨拶だけお受けします」の場合と、「今日は何もないので、ゆっくりお茶を飲んで下さい」の二種類でした。



付きの話

長 利雄

ここでは、災い転じて福となった「付き」の話を語ろう。その体験とは、昭和49〜54年(74〜79年)までの5年間ニューヨークで海外駐在員として勤務し始めた、その前後に起きた一連の出来事である。

この5年間は、丁度第一次と第二次オイルショックに挟まれた、世界経済に激震が走った時期だった。政治的にも激変期、73年はベトナム戦が終息し、世界が平穏を取戻したかに見える一時期だったが、早くも翌74年には、ニクソンがウォーターゲート事件を惹き起こして辞任に追い込まれるといった歴史的醜聞事件が発生、米政界の大混乱を現地でまざまざと目撃する稀有の経験を見せてもらった。

私がNY勤務になった直後の話し。現在家庭に入っている次女(39歳)が当時小学一年生の時、先に単身赴任していた私に合流するために、母親、姉(小6)、兄(小3)と四人家族揃って約一ヶ月遅れでニューヨークにやってきた。

ケネディ国際空港まで出迎えたが、次女はふらふらする足取り。それまでも日本で頭痛、吐き気に悩まされ、国立小児科病院や順天堂など数箇所を診察を受け、できる限りの手を尽くしたが、原因不明のまま私は気に掛かりつつ先にNYへと出発

た。

若い頃、松下社長の秘書を5年間もつとめ、名物課長として有名だっただけに、話を聞いているだけで楽しみでした。

お別れの時は、わざわざ車まで送ってこられ、運転手を制してご自分でドアの開閉をされました。

会議中でも同じでした。「御多忙中で結構です」と言っても、変わりません。「いつも松下社長から、我が社のお客さんは、全世界の人だと教育を受けてきました」と笑顔でした。

数年後、九州支社長時代のことです。ある工場の見学に行きました。あいにくと雨でした。帰りにバスに乗る時、工場長が傘を刺さずに、1人1人に頭を下げて、ずぶぬれのお見送りでした。やはり「車を使われる人は、全世界がブリヂストンタイヤの、お客さんだと社長から教育されてきました。」との言葉でした。

「お客様は神様です」との有名歌手がありました。具体的な行動で示す2人の社長だから、一代で大会社に発展させたのでしょうか。

「にくしん会は、事務系のあつまりですが、理科系でもいいでしょう。」一言で多くの知人にめぐまれた事を感謝しています。

したのでした。

結局家内は、J大助教授の「自律神経失調症」のお墨付きの「日本語の診断書」を、いざという時に役立つものとして(*実は何の役にも立たない)後生大事に携えてやってきた。

旅の疲れもあるだろうし、緊張させてもいけないと、3人の子供たちに「直ぐには転校手続きをしない。何日でも近辺で遊んだらいいよ」と話した。ところが上二人は二三日もすると、忽ち厭きてしまい「現地学校に転校手続きを早くとして欲しい」とせがみ出す。ところが次女だけは、一週間経っても元気が出ない。或る日近くに日本人のホームドクターがいるとの情報を得て、直ぐそこへ連れて行った。

ここからが付いて付いて付きまぐる話。そのDr. Feny(九大医卒の美人女医、NY州の医師資格所有)に診せたところ、すぐに脳腫瘍の疑いありと診断。当方はびっくり仰天。こちらは大学助教授の診断書を持っており、誤診ではないかと疑った。ところが、今でこそホームドクターだが、彼女が元々脳神経内科専攻だったことが幸した。

彼女のかつての研修病院(世界最高峰の一つ、ユダヤ系のアインシュタイン医大付属モンテフィオーレ病院)の恩師Dr. Hに、確認の為に直ぐ診せることになった。そして女医の診断通り、病気は脳腫瘍と確定。手遅れにならないよう直ちに帰国して入院手術を受けるか、それともモンテフィオーレ病院で手術を受けるか、いきなり二者択一の選択に迫られた。

私は新任地に赴任したばかり、これからというときに今すぐ帰国はできない。それにE女医の説明だと、脳神経内科も外科も米国が日本より遙かに進んでいるとのことで、結局米国での手術を決意。摘出手術には、当時世界の脳外科手術の屈指の名医S教授が執刀、Dr.長島(後々病状をよく説明してくださった)が麻酔担当という幸運にも恵まれた。当時の日本の脳外科は、一流大学教授クラスも米国留学で学んでいた段階だ。術後、摘出患部の病理検査で(モ病院在籍の病理学の世界的権威Dr.平野)腫瘍は良性と判明、安堵。日本帰国後のアフターケアも、当時モ病院に留学中の岩田東大助教授(ミスター長島が脳梗塞で倒れた時の東京女子医大記者会見、主治医二人の内の一人)が主治医となってくださることが決定。

何もかも私の思惑を遙かに超え、思いもかけぬ幸運の着地点へ向かってまっしぐらに進んでいくではないか。ただ、あれよ、あれよと驚くばかり。付きか憑きか分からない。もしも私に米国転勤の命が下っていなかったらと思うとぞっとする。それにしても、日本の医学はどうなっているのだ、助教授の権威も何もあつたものではない。とんでもない誤診だ。発見が遅れていたら、娘は一命を落としていた。生き延びても手遅れで完全失明の憂き目をみている。

この時ばかりは私も目に見えざる支えの力を痛感した。家内は付きを付きとせず、「神の愛」と感じ取り、直後から今日までキリスト教の深い信仰生活に入っている。次女は頑張って三児を徐々に増やしていく方針で終始した。

さて最初の3年間は営業主体で主として、日本からの輸入品を販売、来る工場での製品生産開始に備え、ブラジル全土に取引先を広げて行った。只取引先は日本の形態と異なり各種の商品を取り扱い多角経営を行っている関係上、当社の扱いシェアを徐々に増やしていく方針で終始した。

只大切なことは、ブラジルで仕事をし生活する以上は公用語であるポルトガル語を一日も早くマスターすることが大切であった。

夜、ドイツ系の外国語学校に通い、ポルトガル語の勉強に努めた。日系人の生徒は一人もいないで、主として、ヨーロッパ、東欧系の生徒が殆んどであった。小生は仕事で営業である為出張が多く、学校を休む為、何回か3ヵ月後のクラスに戻った。

1年後、サンパウロの師範学校の学生さんに、夜、会社に来て頂いて一対一でポルトガル語の勉強を続けた。ブラジル入国後3年程してなんとか普通の会話が出来るようになり、ブラジル全国に出張が多くなった。営業の手法は大別して、大都市(主に州都)から大都市の移動で全て航空機を利用して廻り、各取引先と交流を深める方法と、もう一つは営業マン(各州担当)に自動車を貸与し、各州の都市、農場を訪問、取引先の営業マンとユーザーを訪ね販売して行くやり方。

までもうけ、日本の明日にいささか貢献している。

この話の前後に、付きの話がまだまだいろいろ繋がっている。紙数の関係でそれらは今回割愛。



ブラジルでの思い出

鬼木正敏

1957年(昭和32年)8月、東京羽田を飛び立ち、カナダの「バンクーバー」向けカナダの航空機の機上にあつた。当時、航空機はプロペラ機しかなく、スピードと航空距離で現在の航空機に比較し、随分劣っていた。「バンクーバー」に到着する前に給油の為アリユージャンのある島に立ち寄り、その後「バンクーバー」に向かった。その後、アメリカの「ロスアンゼルス」、メキシコの「メキシコシティ」「ペルーの「リマ」を経由、最後の目的地であるブラジルの「サンパウロ」に向かい、東京を出発しやつと4日目の夜、到着することが出来た。非常に長い間の飛行機ですっかり疲れていた。

ブラジル国は日本の23倍の広さで、人口は1億7千万人の南米一の大国である。言語はポルトガル語が公用語である。民族は白人系55%、混血系38%、黒人系6%、アジア系1%である。東京ーサンパウロ(リオデジャネイロ等)の時差は丁度12時間でサンパウロが半日遅れとなっている為、当時、日本とのテ

世界各地からやって来た人達と現地の住民との和合で、新しい文化が生まれ、人種差別のない独特の国民性が形成されてきた。

そのような各地域での文化・国民性を有する人達との出会いは私個人がブラジル各地を廻り、誰と出合っても、打ち解けた人間関係を築きあげることが出来、大変素晴らしい国と感動した。

印象に残った仕事の内、3件程記述すると、一つはブラジル全土の国境の主要拠点に陸軍省管轄の通信用自家発電装置を納入し本省と各地との連絡に供する大切な任務を果たすことに貢献したこと、毎年国の予算内で約5年間、継続納入することが出来た。(勿論軍の厳しい技術的検査があつたことは当然である)、二つはブラジル国内に飼育されている乳牛、食用牛等に対し、飼料裁断機を使用して飼料を細かくきざみ、各牛に提供すること、その成育に非常に貢献した。

猶、農場経営者達が機材購入に当たりブラジル銀行と折衝し3年間の融資する制度を確立、農場経営者達の機械購入が飛躍的に伸びることが出来た。最盛期は年間5千セット以上販売できた。

三つ目はブラジルの温帯地域はその地質及び気候から野菜栽培に適しており、生産品は各地域の住民に供給され、大切な食料副食品としてその使命を果たしている。只栽培に当り殆んどが丘陵地帯の為、水の供給が必要であり、その為、灌漑用の動

カポンプセットのかなりの容量のものを必要とする。最も適したポンプセットを供給するにはやはり専門的知識が要求される。

この目的に副ったエンジンポンプセットを専門的に納入した。多くの日系人がこの仕事に従事し、年度によって生産及び販売価格が当り年になると、日本に一時帰国する人が数多くいた。

最後にブラジルといえばサッカーの盛んな国で、子供の頃からサッカーボールに親しみサッカーの競技場が数え切れない程各都市に存在し競技に熱中している。世界制覇も数度に及び4年毎に開催される世界大会は常に優勝候補にあげられている。

ブラジル滞在12年1969年(昭和44年)日本に帰国した。12年間に亘るブラジル滞在は小生にとって、いろいろな人生勉強に大いに役立つたと思うし、又感謝している。



買占め物語

川崎 靖

ライブドアによる日本放送(株)株式の買占めめぐりフジテレビとの紛糾が大きく報じられ、マスコミ報道では国民も両派に別れて賛否両論それぞれかつてな意見を述べあつた。

ところで、株の買占めは何も今に始まったことではなく、その規模に大小はあつたが昔から多く行われてきた。私は仕事柄

いくつかの買占め問題にかかわってきた。というより、やむを得ずかかわされてきたという言い方の方がいいのかもしれない。仕事をリタイアした今それを静かに想い起こしている。

私は、病気のため「にくしん会」の皆さんより2年遅れて昭和31年九大卒業、日本証券金融(日証金)に入社した。

折からの就職難のなかでの入社は、ひとえにくしん会の城崎夫人のお祖父さん(吉次鹿蔵さん)のご尽力によるものであつた。ちなみに私の結婚式の仲人も城崎夫人のご両親である。

株式の買占めには色々な方法がある。吸収合併やTOBは吸収する側とされる側の企業があらかじめ話し合つて合意した場合が多いが、ひそかに買占めめる場合は、信用取引を利用するケースが多い。ライブドアのケースは市場外取引のほか信用取引も利用している。

ご承知のように、信用取引は証券会社から株式の購入資金、または売却する株式を借りて行う株式の売買のことであるが、証券会社はそれに必要な資金、または株式を調達できなかった場合、その不足分を証券金融会社の貸借取引に依存している。

いわば貸借取引は信用取引のラストリゾートであり、その依存割合は平成17年4月現在で信用取引所要資金の約40%、所要株式の約50%程度である。

そこで信用取引により買占めが行われると否応なしに貸借取引に影響が及び日証金も騒動に巻き込まれることになる。というのは、貸借取引の貸し付け条件がそのまま信用取引の貸し付

け条件に反映されることになっていて、日証金がおこなつた規制措置がそのまま信用取引の顧客の取引を拘束することがあるからである。

古くは昭和32年の東洋精糖事件、主役はかの横井英樹氏、発行済み株式の4割近くが信用取引により買占められ、またこれに対して空売りが仕掛けられた。当時新米社員であつた私は、それに伴う株不足の対応に奔走する先輩達をただ眺めているだけだつた。

その後昭和45年の片倉工業株式の買占め、昭和55年の宮地鉄工株式の買占め等私もその対応に若干かかわる事件もあつたが、なんといつても私が直接火の粉を浴びることとなつたのは、平成2年から3年にかけての福助株式の買占め事件である。当時私は貸借取引部担当常務で連日内外の対応の矢面に立たされてた。関係者が会社まで、時には自宅まで押しかけてくる始末、日証金の規制措置によつて損をした、規制をすぐ解除しろ”というのが殆どである”なんとか対応したものの、折からの女房のくも幕下出血の手術と重なり(大宮日赤病院で手術、一命をとりとめたものの、失語症となり、リハビリを受け。現在殆ど回復。)疲労困憊、今思えばよく体もつたな”と感じている。

これだけでは収まらず、遂に政治問題化して、後日衆議院の「証券及び金融問題に関する特別委員会」に故多島社長が東京証券取引所理事長(故長川専務理事が代理出席)とともに参考人として呼び出され、私もこれをサポートするため同行するこ

ととなつた。

かなり緊張したが、無事質疑応答を終えて、それ以上に発展することはなかつた。その時質問した某党の議員は受託取崩による質問であることが発覚、とうとう議員を辞めるはめになつたと後日伝え聞いた。

買占めは、当該会社にとってはその存立基盤を左右しかねない出来事である。

来年は商法改正に伴い外国企業を巻き込んだ買占めがさらに活発になるらしい、関係当事者にとっては頭の痛い時代がやって来る。

さて、今古希を超えて、あらためてつくづくこれまでの人生を振り返つてみた。

物心が付いたときは、既に母子家庭だつた。私が生まれた日の父(当時満鉄社員)の日記を見た。月足らずの早産児で、首にへその緒を巻きつけていて、すぐには産声をあげられなかつたらしい。“この児はちゃんと育つかしらん”と心配したそうだ。いまだに物覚えが悪いのは事実だが、今は父の寿命の二倍を越える年齢に達した。よくもまゝここまで生きてきたもんだ。途中いろいろなことがあつたが、いろんな「ふれあい」が支えてくれたのは間違いない。献身的な母の力は勿論であるが、家族会社の友人、小学校・中学高校・大学の友達、趣味の仲間……「にくしん会」の仲間もその一つである。幸か不幸か、私は「にくしん会」発足以降、転勤が無く、一度も東京兜町の地を離れ

ていない。「にくしん会」例会の欠席は僅かで、殆ど出席させてもらっていると思っている。そこでの「ふれあい」は「私の心を広げ又うるおしてくれた」今後も元気でいる限り、「にくしん会」の仲間との付き合いを大切にして続けて行きたいと願っている。



「にくしん会」との出会い

吉瀬 洋助

55年前の4月1日、医学部の講堂（当時）で行われた入学式に出席した。

入学式では菊池勇夫総長（当時）の訓示を聞いた筈であるが、どんな内容であったか？

講堂の近くでアルバイトの学生（＝大学の先輩）が角帽を売っていたので購入した。

その頃大学生は角帽を被るものと決まっていた。あの「角帽」はいつごろから姿を消したのだろうか。当節の大学ではスポーツ応援団にその名残を止めるのみ。

私は教養課程理科に入った。生物系・非生物系のいずれに進むか決めかねていた。

第二分校に通学することになり、同分校の寮に入った。同分校での生活がスタートしたのは入学式から丁度一カ月後。当時

は全国的に学生運動が活発であり、九大においても然り。大学当局ではその対応もあって新入学生の受け入れ態勢が直ぐには整わなかった、と聞いた。5月1日に同分校に初めて足を踏み入れたとき掲示板・あちこちの立て看板に書かれたメッセージが目飛び込んできた。曰く『レッドパーシ反対』『単独議和反対』『五大国は平和協定を結べ』『学園の自由を守れ』等々。私の入校を最初に出迎えてくれたのは、これらスローガンであった。

第二分校は筑後川の畔、小森野平野に囲まれた牧歌的な環境にあり、ここを散策していると万葉集の叙景歌などが自然に思い浮かんでくるようであった。寮の日常生活は、これとは対照的に未だ戦後の耐乏生活が（とくに食生活の面で）続いていた。寮では6畳の部屋に6名が起居することになった。後に10畳の部屋に移ったが、ここでは約10名（頻繁に出入りがあり人数は一定しなかった。）との共同生活であった。

寮生には朝方、夜型、深夜、夜明型それぞれの生活パターンがあり、『学究的な雰囲気の中で落ち着いて真理を探究する』には、あまりにかけ離れた世界であった。

翌年久留米市国分町にあった第三分校が閉鎖になり、同分校の寮生がかなり第二分校寮に移ってきた。寮生は理系文系、且つ新旧両制度の高校卒業生が混在した。私は多くの面でカルチュアショックを受け、また啓発された。この寮生活において私自身が得たものは大きく『学生の本分たる勉強』の不足を補つ

て余りあるものがあつた。

教養課程が終わりに近づき学部を選択する時期になった。私は『一つの正解を探索する自然科学（私流の解釈）』よりも『多様な解が存在する人文・社会科学』の方に魅力を感じ、結果として法学部に『転向』した。昭和29年企業社会に入り、一年余り福岡市内で勤務した。翌年東京の本社に転勤、以来武蔵野平野を移り住み今日にいたる。

さて、古い手書きの名簿が私の手元にある。湿式複写機でコピーされたもので、かなり変色している。もう30年位前に作成されたものではなからうか。

『昭和29年（法経文教）卒、在京（含周辺）者名簿』と銘打つてある。或る時代・或る空間（＝箱崎の九大キャンパス）を共有し、且つ当時首都圏の在住者の中から偶然ピックアップされた人たちの名簿である。この名簿に登場した100名余のうち20名位が現『九大にくしん会』の名簿に重なる。

この名簿を手にする度にある会合の情景が鮮明に蘇ってくる。京橋の裏通りにあつた古い小料理屋に50名位が参集して賑やかな集まりになった。この席には民法の船橋諱一先生、仏語の佐藤文樹先生、それにもう一人の先生がおられた。

この会合で知り合ったS氏から後日、「29年卒文系OBが時々集まる会があるので参加してはどうか。」と勧められわたしは仲間入りをした。この会はやがて「九大にくしん会」と称するようになった。S氏はその名付け親である。

わが「にくしん会」の例会は延々と回を重ね、先3月の例会で実に108回。私たちは例会開催の度にこの浮世の煩惱を一つずつ洗い落とし、漸く108のそれを洗い流したということにならうか。

私にとって「にくしん会」は、人生という海を泳ぎつつ時々掴まって、ひととき『にくしん会ならではの、くつろぎ』を得ている大船のような存在である。

この大船が、これからも長く浮かんでいてほしい……と願っている。

当会員として忘れることが出来ないのは、かつて「にくしん会」の会員でありながら、いまは幽明境を異にする幾人かの仲間のことでありませう。

最後になりましたが、ここで合掌しつつ彼らのご冥福をお祈りします。



初めての同窓会コンペ

城戸 昭良

微風快晴、小春日和のこれ以上望めない絶好のコンディションでのティーショット。白球ははるか青空の中へ：となる予定が、無常にもチーピンボールは林の中へ：

こうして、九大同窓会はじめてのゴルフコンペは始まったが、

ショットは不満足ながら、良くここまで来たなどの満足感のほ
うが大きかった。

星山君から、発展しつつある九大同窓会の基礎固めに、名簿
の趣味欄で最も多いゴルフのコンペを企画したいかと相談があ
ったのは、まだ初夏の頃であった。

同窓会とか、会社のOBとか繋がり強いグループでのコン
ペは簡単だが、面識もない、組織もまだ脆弱な同窓会のコンペ
の開催には、正直のところ、「ウーン」と唸ってしまった。
コンペと称するにはすくなくとも20名は欲しいが、とても無
理であろう。

だが、星山君の意思は固い。私もゴルフコンペのデモンスト
レーション効果は承知しているので、「よし やろうじゃない
か」と意気投合した次第。

というのも、私にはプライベートコンペの経験もあり、また
秘策もあった。

その秘策とは、硬式野球部のOB会（九球会）の活用である。
九球会の絆は強く、東京でも新年会に始まって、年2回のコン
ペ、60歳以上のシニアコンペ、旧帝大OB戦等のほか、昨年の
福岡での創立90周年記念大会には、全国から100人以上が集
まって、総長を招いての式典やOB戦・ゴルフに興じたものだ
った。

相撲の番付けさながら、縦社会の体育系OB会にあって、29
年卒という肩書きはめっぽう強い。一部上場の社長であっても、



何故アイルランドだったの？

久保正明

退職してフリーになったのが一九九五年の六月末、その十日
後からアイルランドの四番目の都市であるリムリックの郊外に
家を借りて三年間住み続けたが、多くの友人から何処が面白く
てアイルランドを選んだのかとよく聞かれる。

ご存知のように、僕はミッシヨンスクールの西南学院高校の
出身で、高校では二時間目が終わるとチャペルで全校生徒が集
まる礼拝式があったり、授業の中に「聖書」の時間があつた。
そしてたまには教会に顔を出してもいたものだから、キリスト
教を初めとする「宗教」というものに特に関心を持つようにな
っていた。そんな次第で六本松での「宗教」の講義には顔を出
していたが、学生は確か七名程度で、先生の名前は忘れたが、
「現在、大学で宗教を教えているのは東大と九大だけだ。宗教
を専攻すれば、将来大学の数は増えるだろうから教授になる道
は広い」との話に「これはしめた」と思ったものだった。

そこで箱崎に進むに当っては当然『文学部』を希望したが、
宗教学の大学教授を目指すと聞いた親父が、大学院、助手、助
教授そして教授という過程を考えるとお前の面倒を見るのも大
変だ、これからは銀行の時代が来る筈だから『経済学部』か『法
学部』にして銀行に就職せよ。そして早く自立せよ。…という

年次が下なら「お前」呼ばわりの世界だ。

不足するメンバーは後輩を引っ張り出すと宣言してしまった。
有志と一緒に作戦会議に入った。

条件とし①最低5組20名は集める。②参加しやすい場所・魅
力あるコースを選ぶ。③気候のよい時期、を満たすこととした。
場所は、12初旬にプロのトーナメントがある東京よみうりカ
ントリークラブとし、気候も良い11月と決めた。

幹事となった後輩は、さらに先輩を廻って賞品に寄付を頼む
ことまで提案する。

早速往復はがきを使つての募集に入った。さらにビアパーテ
イーでもPRすることとしたが、これは、アルコールが入ると
誰も聞いてくれない空振りに近かつた。

結局、半分は、九球会動員となり、それから電話での各個撃
破でなんとか格好をつけたものの、若い連中まで協力し、花を
添える意味で61年の紅一点も参加してくれた。

また、にくしん会の辻君・松田君も貴重な構成員となつてい
ただき、感謝している。

パーティーも和やかに、初めてにしては「成功裡」にコンペ
は終わったが、問題は「継続するは力なり」であろう。当分の
間九球会の幹事が続くのも止むを得ないかと思つている。

次第で、またまた主体性無く、ご存知の通り経済学部に進んだ
のであつた。

さはさりながら、宗教の起源には何となく気になるところが
あつて、退職するまで教会に顔を出したり、聖書は勿論、宗教
の本を読んだりしていたが、中でも「これはすごい」と感じた
のがJ・G・フレイザーの「初版・金枝篇」（現在ちくま学芸文
庫がある・二冊本）と「金枝篇」（岩波文庫・五分冊）であつ
て、宗教の起源を研究したこの本は長い間の座右の書となつた。

僕の姉二人はクリスチャンで、早世した長姉の十字架には「神
は愛なり」と書かれていたし、教会でも「隣人を愛せよ」と説
いている。曹洞宗のお経「修証義」も万物に対する愛を説いて
いる。そもそも愛のものには争いが無い筈なのに、古くは十字
軍の遠征とか、同じ聖書を使つているユダヤ教とイスラム教の
世界での相互の争いは今も新聞を飾るに事欠かない。前世紀に
はキリスト教国同士の戦争もあつた。アイルランドでも十二世
紀以降八百年に及ぶイギリスの支配に対してなされた闘争の要
因の一つに、新旧のキリスト教の対立があることは有名である。

僕はそのような最近の宗教間の対立にも関心はあるが、それ
よりも初期のキリスト教時代の使徒パウロがローマから迫害を
受けたことに代表されるように、原始宗教側にはキリスト教に
対する不信感や抵抗感があつたと見られる。これに対しアイル
ランドでは原始宗教の世界にキリスト教が入ってきたのが紀元
四三三年の宣教師・聖パトリックの来島によるとされているが、

ドルイディズムと称される原始宗教から大きな抵抗もなく受け入れられている。これは何故か？…原始宗教とキリスト教との間に相似た要素があったためではないか？…これがアイルランドを選んだ理由であった。

そうゆうことを知るには一般に文献を調べれば良いのだが、アイルランドには文字文化が無くて、その代わりにあったのがオガム文字という石に刻まれた直線文字で、主として墓石に記入されて、例えば「誰その息子」とか、「だれその子孫」とあるだけでその人の個人名すら分からない墓標に用いられているのが主なのである。従って古代ローマや古代ギリシャのように世の中の動きを調べる手立てが無い。あるのは五、六世紀以降の修道院の修道士達が口承伝説の神話や民話などを筆記して残したものや、十九世紀後半から始まったW・B・イェイツ等による民話収集運動とでも表現すべき活動によって集められた各地の民話があるくらいであることが分かり、しからば神話をたずね、古代の遺跡をこの目で見て、それらの特徴から原始宗教の特質を追い求め、聖書から何われるキリスト教の特質と比較することしかないのではないかと考えたのである。

先ず初めに取り組んだのが大きな石で作られた十字架である。High Cross(高十字架)と呼ばれているくらい背が高いもので、破片を含め全国に点在する計百二十九箇所を見て廻った。そこに彫り込まれている彫刻の特殊性を見るためである。二番目はドルメンと呼ばれる墓で、英和辞典には「垂直に立てた数個の

石の上に平石を乗せた新石器時代の遺物」とある。これが十三箇所。三番目は長さ六、七メートル程ある巨大な墓石といわれるスタンディング・ストーンが六箇所。四番目はその他の墳墓で、世界的に有名な巨大墳墓であるニューグレンジを含む墳墓群32箇所。五番目は大きな石を周りに立てて祭儀や集会を行ったと見られるストーン・サークルが15ヶ所。六番目は五十ばかりの城跡や教会の廃墟等々であって、それらの石や壁に施された彫刻と石の配置、それにメイン・ストーンの示す方位を知るといふ暇にかかる調査であった。これらの調査の一部については、嘗て「にくしん会」の席で写真をもってお示しした事があったのでご記憶の方もおられると思う。

この調査の結果として、原始宗教とキリスト教との共通項と思われるものを僕なりに掴んだつもりだが、ここに示すには紙幅が足りないので又の機会に委ねることにしたい。

「何故アイルランドだったの？」という質問への答は以上の通りである。

(注) オガム文字 (Ogham) について

恐らく紀元前三世紀頃に始めて使われ、八世紀頃まで使用が続いたとみられている。

四角な石の角の

①左右に渡って水平に引いた線が 一本はA、

二本はO、三本はU四本はE、五本はI、

②左右に渡って斜めに引いた線が 一本はM、

二本はG、三本はNG、四本はZ、五本はR、

③右側だけに引いた水平な直線が 一本はH、

二本はD、三本はT、四本はC、五本はQ、

④左側だけに引いた水平な直線が 一本はB、

二本はL、三本はF、四本はS、五本はN

という具合になって計二十文字である。記述は下から書き出し、石の角のテッペンまで進み、必要とあらば反対側の角のテッペンから下に向かって書いてゆく方法がとられている。今尚解説が難しいと言われている。



2005年夏

隈 健

今年の夏は暑い。連日高温、多湿、熱帯夜が続き、環境庁提唱のクールビズが役所や企業で人気を呼ぶなど、例年にない暑さである。しかし、今年の暑さはそれだけの理由ではない。

第一に、日露戦後100年、第2次大戦後60年の節目にあり、わが国の将来について暑い議論が戦わされている。

第二に、靖国、教科書、安保理改革などの問題に絡め、中国の反発が強く、主要都市で反日デモが暴徒化した。デモは一応沈静化した。これは中国政府がデモに対する自らの危機感からこれを禁止したものであり、中国の対日姿勢は依然として厳

しい。

第三に、郵政民営化法案の参議院での否決を受けて、衆議院解散、総選挙とめまぐるしい。小泉総理は郵政民営化こそ行政、経済万般の構造改革の突破口であるとして、賛否を国民に問うとして総選挙を決断した。

第四に、この夏首都圏だけでも3度ほど大きな地震が発生し、交通機関が大きな打撃を受けるなど首都圏の耐震脆弱性を露呈した。

第五に、国外では、7月に2012年オリンピック開催地がロンドンに決定した翌朝、しかも、スコットランドで開催のG8サミットの初日を狙うかのようにロンドンの地下鉄で同時多発テロが発生した。さらに、8月にはイラクの恒久憲法草案の決定のタイムリミットが到来したが、クルド、シリア派、とスンニ派の間に連邦制と石油利権をめぐる利害が対立し、交渉決裂のまま10月に国民投票に付されることとなった。しかし、その後も自爆テロ、武装集団の攻撃が続発しており、本格政権の樹立による治安と政情の安定化などその前途は予断を許さない。その外、イスラエルのガザ地区撤退という大きな動きは見られしたが、パレスチナ中東和平の行方はなお混沌としている。

余暇三昧の今日この頃であるが、最近の状況はあまり安閑としておれないような気がする。これらについてやや感想めいたことを記してみたい。

一、戦後60年問題

明治維新(1868年)から満州事変

(1931年)に始まる15年戦争に突入するまで63年で、第二次大戦後ほぼこれに等しい60年を経た今日、わが国は大きな転換期にきていると思われる。今年にはバブル崩壊後長い不況を経ようやく金融の建て直しを完了させ、企業はリストラを経済政策に転じ、経済は踊り場を脱して脱デフレを目前にしている状況にある。戦前は、1927年のわが国の金融恐慌、1929年の世界大恐慌を経て不況と第二次大戦に突入し、戦争を経てようやく恐慌を解決した経緯があるが、平成不況はこの大恐慌に似た状況にあったと思われる。しかし、戦後の今日は、グローバル化の進展とEU、ユーロのスタート、BRICSに中国の経済の勃興、成長によりマーケットが飛躍的に拡大し、日本もその中で産業の強みを発揮しており、将来展望は暗くないと考えられる。

二、中国問題 中国の最近の反日姿勢は、戦前の反日、侮日、日貨排斥を想起させ、これに対するわが国の国民感情の昂揚に心配な面もあるが、さきの反日デモに対しての政府、国民の対応は冷静さを維持し懐の深いところを示しており、今のところ心配することはないように思われる。中国の動きにいちいち反応して極度にエスカレートすることは戦前の愚を繰り返すことになる。しかし、中国がアジアの覇権を狙うとすれば、日本がこれにどのように対応するかはなかなか難しい問題である。わが国としては憲法上不戦の誓いを堅持しつつも自衛力を強化することが肝要であるが、そのうえで、日、中、韓の連携を基

いがある、初めてこの日本という国土、文化、伝統が成立している。……日本という国土、日本人の日々の営みは、常に死者との共生観のうちにある。」と述べている。

石橋湛山は1945年「靖国神社廃止の儀、難きを忍んで敢えて提言す。」の中で、「然るに今、大東亜戦争は万代に拭う能わざる汚辱の戦争として、国家を殆ど亡国の危機に導き、日清、日露両戦役の戦果も又一物も残さず滅失したのである。……後年のわが国民は如何なる感想を抱いてこの神社の前に立つてであろう。……戦没者の遺族の心情を察し或は、戦没者の立場において考えても、かかる怨みを蔵する神として祭られることは決して望む所ではないと判断する。」と述べている。

私の率直な気持は折口、河上、江藤、の考えに近い、一方で、石橋湛山の見解は、戦前より小日本主義を提唱して貿易立国を主張していた者としてその論旨は一貫しており、傾聴に値するものと考えられる。

四、衆院選 この選挙は、郵政民営化の是非を問うとともに、4年余の小泉政権の信任を問う選挙でもある。そしてこの是非かは、既得権益に縛られた旧来の政治家と既得権益から離れて政策選択が出来る政治家とを峻別する意味で、従来のものとは異なる選挙といえる。郵政民営化が全てではないが、兎に角この問題を突破しなければ全ての改革が進まないという問題提起のシンブルさが、有権者の政権選択にとっても非常に解りやすい土俵を敷いたという意味で画期的なものと言えるであ

盤として、アジア、太平洋諸国の経済的、政治的連携の深化を図っていくことが大切であろう。

三、靖国問題 昨年末、久しぶりに靖国神社を訪ねた。威風堂々たる大村益次郎の銅像が象徴するように、また遊就館の展示が示すように、この社は日本近代化の歴史における殉難者を祭る国家の祭殿である。幕末、維新以来の近代化の過程でわが国は偉大な成功を遂げたが、その反面アジア侵略という不明の時期もあった。しかしそれらの成功と失敗の経験のうえに今日の日本を築きあげた。それらの思いを回しながら拝殿の前に立ち、国難に殉じた神々を拝すると、厳肅な気持となり心身ともに引き締まる思いがする。

今年刊行された高橋哲哉氏の「靖国問題」は賛否両論の立場から一読に値する。史料を丹念に渉猟しているが、その中で靖国に関する何人かの見解の引用は注目を引く。1943年折口信夫は、「招魂の御儀を拝して」という記述の中で、靖国神社の招魂式に初めて出席した時の感想として、「国民として、魂の底に徹するような深い感激」と述べている。河上肇は、1911年「日本独特の国家主義」の中で、「故に看よ、この国家主義に殉じたる者は死後皆神として祭らるることを。靖国神社はその一なり。しかして余が郷の先輩吉田松陰先生もまたこの故に神と崇められ」と述べている。

江藤淳は、1986年「生者の視線と死者の視線」の中で靖国公式参拝について「そういう死者の魂と生者の魂との行き交

ろう。 兎も角、わが国の財政破綻が迫っている状況において、政策提案が論議の末大勢が決まれば事はスピーディに進められなければならないことは明白である。改革の須ゆの遅延も許されぬ。選挙の結果は3分の2の多数を得て与党が圧勝し、郵政民営化法案の成立は確実となった。9・11選挙が終わった今も残暑なお厳しいが、戦後体制を変えて国を再構築する取り組みが始まろうとしている。



矢部線プロ野球軍団
—素敵な仲間たち—

古賀一弘

昭和20年8月15日中学2年生の夏、戦争が終わった。命を賭けて神国日本を鬼畜米英から守ろうと、固く心に誓っていた軍国少年の夢もあっけなく消え去って、虚脱感となんともいえない開放感が体中に溢れた。

昭和21年、天皇の神格を否定する「人間宣言」の詔書が発せられ、新憲法が公布された。僕らは中学3年生になった。

国鉄矢部線の貨物列車が福岡県八女郡黒木町から羽犬塚町まで、人間を乗せて走り出した。福島町の自宅から羽犬塚の学校まで、6kmの徒歩通学が汽車通学となった。一日に数本しかない汽車である。朝の一番列車に乗り学校に行く。授業開始まで

に一時間以上も自由な時間がある。

自然と汽車通学の仲間が中心となり野球が始まった。比較的背の高いチームがジャイアンツと名乗り、背の低いチームがホークスと名乗った。リーグの名は人呼んで「矢部線プロ」。中学5年になる時、新制高校二年となったが、卒業まで雨の日を除き、試験中だろうがなんだろうが毎朝プレイした。

各チームの登録メンバーはそれぞれ五、六名。九名もいないからセカンドのない三角野球である。戦後の物資のない頃だ。まずバットは打球面がボールに削られて狭くなったバットを野球部から譲ってもらった。次はボール、軟式のボールを買えるような金はない。手で作るより他に方法はない。

ボールの芯は鉄製のナットなどを使用、それをぼろ切れで幾重にも包みタコ糸でぐるぐる縛る。これで中身は完了。次は外側である。厚手の布切れをひょうたん型に二枚に切り、縫い合わせる。軟式ボールの三分の二位の大きさだ。こんな球でもカーブ、ドロップを出すことができた。しかし、残念ながら布製のボールである。打たれて転がっている中に朝露に濡れて、だんだん綻び破れていく。糸が切れて、ピッチャーが投げた球がブルブルと音を立てて、飛んでくる。当然スピードはない。バッチングチャンスだ。そしてこの球は長くても三日の命、またボール作りである。

ジャイアンツの黒岩は百八センチの長身から投げ下ろす超スローボール、コントロールは抜群だった。好漢惜しむらくは、

地方公務員となった池田は華麗なフットワークで一塁を堅守。いい男だったのに彼も早く死んだ。

銀行員となった中島は強肩、強打、ホークスのホットコーナーを守っていた。

外野井上は金持ちの坊ちゃん。ある日、グローブ持参で入団したいと申し出てきた。素手で野球をやっていた彼らは大歓迎で彼を受け入れた。現在東京で実業家として活躍中。その他、ピッチャーで強打者の松本、喧嘩なら任せときの男だった。

悪がきの代表選手みたいな川口、中村。卓球選手だった高松は歯医者になって、僕らの歯を治療してくれたが、五年前、脑梗塞で倒れ、治療中である。早く元気になって欲しいものだ。

卒業以来、五十五年半世紀が過ぎた。人生で一番楽しかった時、今でも時々矢部線プロの夢を見たりする。夢の中ではニキビの少年たちが手製のボールを投げ、すり減ったバットを振り、懸命に走っている。

毎年五月に地元で同窓会が開催される。来年は生き残った七十過ぎた素敵な仲間たちと、手製の布切れボールで矢部線プロをやろうと計画している。

大学は出たものの折柄の不況のため就職できず、酒と女と博打に身を持ち崩し、結核のためわずか三十代の若さで死んでしまった。

キャッチャーの深町はどんな球にでも食らいついていくファイトマン。八代重紀の歌を作詞したこともある詩人である。

ファースト古賀は選球眼抜群、インコースの球も右翼に流すライトヒッター。愛称は「父ちゃん」うっすらと髭を生やし、メガネを掛け東條英機に似ているところから名付けられた。ボール製作担当。六年前、胃ガンのため手術。まだ生きている。色が黒いことからズルチン(石炭から作られた甘味料)と渾名されたサード服部は万能選手、矢部線プロ史上唯一のファーストからサードへ盗塁した男。海上自衛隊を退役、現在僕ら同期会の幹事を勤めている。

外野の哲ちゃんこと江崎は、飄々と野球を楽しむ無類の善人。善人の故か、女に騙され呉服屋をつぶしてしまった。一方、ホークスの高橋は鋭いカーブと絶妙のコントロールを誇っていた。彼もボール製作担当。陸上自衛隊を卒業して東北に住んでいるが、今でも八女弁が抜けない。筑後の方言が東北の人にわかるのかと心配になる。昨年暮れマラソン中に転び怪我したとのこと。一日も早い回復を祈る。

航空会社に就職した竹村はキャッチャー。体は小さいが闘志の塊。女生徒によくもてた。僕が家を買う時、ローンの保証人になってくれた。



雑感 三題

境 隆清

一、これまでを振り返り

本年6月の株主総会でハーベスト(株)の役員を退任し顧問となったが、当社と三菱電機(株)との合弁会社の監査役と神奈川県給食サーピス協会の事務局長の仕事は継続する事となった。特に後者は県内の主として小学校給食業務の民間委託を推進する神奈川県・東京の事業者41社の集まりで、次代を担うことも達の心身の健全な成長発達をめざす学校教育の一環としての給食業務について、現代病といわれる生活習慣病等にも対応し食育の視点から真摯に取り組んでおり、今後の役割が一層重要性を増してくるであろう。但し来年75歳を迎えるに当りこれからの生き方を模索していきたいと思う昨今である。

所でこれまでの人生の中で「九死に一生を得た」といえることが二度あった。

1回目は、中学3年のときに学徒勤労動員で大牟田三井化学の軍需工場で働いていたが、終戦直前20年8月7日工場爆撃で学友7名が命を落した(因みに原爆8月6日広島・9日長崎)。実はその日はゲートルを巻いて家を出ようとした時、それまでは皆勤していたが不思議と行きたくなく工場を休んだ。僕の

現場では工員・職長・係長と学友1名が防空壕に入る間もなく亡くなった。翌日現場に行ったが、工場全体の建物施設等が僕らの現場も含め完全に爆破され、廃墟と化していた。もし出勤していたら僕も完全に命をおとしていた。この7名の鎮魂と平和の祈りをこめ、52年11月校庭に戦没学友の慰霊碑を建立し、毎年夏、皆で供養を行っている。

2回目は、反戦運動が激化していた中で40年後半？に起った三菱重工爆破事件である。

重工ビルと電機ビルは丸の中通りを挟んで建っているが、事件は12時45分に起きた。僕は昼食後丸ビルにぶらりと出かけることが多く、その日も中通りから電機ビルに入りエレベーターで8階の自分の部屋に入った途端、ドカーンと地響きと共に道路側の全ガラスが粉々に壊れた。もし僕がもう1分遅く中通りを歩いていたら、爆風で吹っ飛んでいたはずである。幸い僕はその1分前に電機ビルに入り大災害を免れたが、その後の救急対応が大変であったのは申すまでもない。

3回目の危機にはまだ遭遇していないが、「今生きていることがすべてであり、今にベストを尽くす」との考えで、これから益々我々の年代として重要度を増す健康の自己管理に心がけていきたい。

「西野流呼吸法」道場に通い始めて幸い16年目を迎え、「継続は力なり」を実感している。

的事象については、この地球に住む全世界の人類が等しく再認識し、その在るべき姿を今日究明すべき根源的問題を含んでいくといえないか。

所が現実には世界各地で飽くなきテロや紛争等が起っており、世は正に恐怖と激動の時代に突入したといえる。然しそうであればこそ21世紀の世界を律する指導原理を全世界のリーダー達が、夫々の国家や民族、宗教を超え真摯に考究すべきで、地球温暖化等の問題もあるが現状の延長線上の対応でなく、例えばこれらの紛争等が一気に吹っ飛ぶような地球的規模の危機が、問題地域を中心に突如目前に迫ってくる事態が神罰？で劇的に起きないものかと。さすればこの異常事態への危機感が主要各国首脳を強烈に襲い、即刻全人類の叡知が結集され、真摯に地球を救い、かつ夢ある豊かな世界へと変革していくことに繋がらないかと、突飛な21世紀の夢。『破壊と創造』



電話 昭和56年秋

坂口重幸

日本海に沈んでいく夕陽は悲しいほど美しく且つ荘厳である。茜色に染まった水平線を左に望みながら車は金沢に向け北陸道を走った。

片山津で開かれた同業各社との懇親コンペからの帰途には遠

二、昨今の殺人事件に思う

以前奈良市小学1年の女兒が誘拐殺害された事件が起きたが、当時あまりにも極悪残忍な犯行として社会に衝撃を与えた。これに対し同種の犯行を防ぐには地域社会の連携や学校の警備強化が必要だ等の声がよく聞かれた。しかし如何なる防禦にも完璧はない。更に昨今は幼児を対象した事件に限らず毎日のように年齢や男女に関係なく、親子間でもいとも単純簡単に殺人事件が起きている。だとすれば殺人事件の根絶をめざすことを考えるべきで、「人を殺した者は特段の事由がない限り全責死刑」との法乃至社会慣行の確立こそ急務ではないか。勿論刑法199条に死刑の規定はあるが死刑判決は極めて例外で、むしろ加害者が人を殺そうと思った瞬間俺も殺されると死刑の恐怖に戦くことこそ殺人事件の根絶に繋がらないか。人権尊重の議論の中で極論かもしれないが逆にこう思う昨今であり、時限的措置も含め考慮に値する課題ではないか。

三、かけがえのない地球に想いを寄せて

160億年前にビッグバン（大爆発）によって宇宙が生まれ、地球が出来たのが46億年前、そして最初のもっとも原始的な生命体がその地球上に現れたのは今から30数億年前、然し人類が一応文明と呼べるようなものを創り出したのは今から7、8000年前（インダス中国・エジプト・メソポタミア等世界4大文明）といわれている。この宇宙と生命の誕生という正に神秘

いなのだがプレイ終了後軽く喉を潤した席で、19番ホールで再挑戦を」という発議があり犀川のほとりの旅館で雀卓を囲むべく移動中である。

提案を受けた時、一瞬（今日は家内が久しぶりに当地に来てははずだからちよつとまづいな」という意識が脳裡をかすめたが、ライバル社と交流することも仕事のうちと自分に言い聞かせ、つい同調して仲間に加わってしまったのだ。

さて、とり合えず遅くなることを知らせなくては」と旅館の玄關隅に設置された電話機に向かったのだが肝心の番号が判らない。

毎晩のように東京に向け電話しているのに今まで自分の電話番号なんて考えたこともないのに気づいた。4月に赴任して半年過ぎたが電話帳には載せていない。それに無人の吾が部屋に電話するケースはありえないのだから自分の番号など憶える必要がない。

仲間にはせかされて雀卓を囲み、女中さんに頼んで調べて貰ったが仲々判明しなかったせいもあってやつと話が通じたのは第二ラウンド終了後で夜もかなり更けていた。

電話口の家内から「夕飯を用意してずーっと待っていたのに」と恨み言を言われ言訳するのに冷汗を沢山かいた。

ポケットの中の煙草が電話機と入れ替わり、メッセージを発信したり、カメラになったり、そのうえ財布の役割まで果たすようになるとは夢にも想像しなかったスローテンポのよき時

代のひとコマである。



往時茫茫

佐藤貞夫

半世紀を超えた大学時代の想い出といっても、セピア色に完全風化したものと、現在までそこはかとなく続いているものとが混在しています。

六本松といえば、プールサイドにあった文化部のロッジでの日々と、ウイロビー書簡違反とかで乗り込んできた六本松署のポリ公との乱闘事件が鮮烈に想起されます。

私は文芸部のキャップでした。フランス文学研究会との同居でしたが、ほぼ毎日とぐろを巻いていました。

太宰治や坂口安吾などいわゆる破滅派の小説を乱読していましたが、かたがた一知半解ながら小林秀雄を通してドストエフスキに迫り、難解だったサルトル・カフカ等もかじっていました。

コンパではロシア民謡やソ聯の革命歌を旧制高校寮歌と共に熱唱する戦後学生運動初期の熱気にナイーブに浸っていました。当時、日本共産党は主流派と国際派に分裂しており、全学連の主力は国際派に属していました。色んなものをお子様ランチ風にかじった私は、政治的にはマルクス・レーニン主義に傾い

ており、非党員でしたが、大西巨人・井上光晴がかんていた国際派の文学機関紙(?)新日本文学の九州支部に所属していました。

自宅通学で、旧制高校の弊衣破帽美学とも遠い日常だった私には、自治会の中核活動者(奥畑・大坪・中村さん等)が或種スタイル的に眩ゆくみえました。サロンの共鳴しても、実践が伴わぬ限界を充分自覚していただけに、プチブル的とか日和見主義というレッテルを貼られることをマジに恐れてもいました。

二年目、第二分校から野林正路が来て文芸部に加入、同時に彼は自治会書記長に就きました。自治会では阿修羅の如く咆哮するが、個人的には訥訥と語るやさしさとユーモアをもったむしろシャイな男で、国鉄の線路工夫などにオルグ活動も続けていたようです。

よく拙宅に飯を食いに来ましたが、彼は正式の日共黨員でした。今でこそ噴飯物ですが、ラムネ爆弾の実験を油山でやった帰路も立ち寄りしました。その後、第一分校長宅に爆弾を投げ込み逮捕され、奥畑委員長らと共に放校処分となり六本松から消えたことは衆知の通りです。(野林は数年後、東洋大学にいら、言語学を専攻、茨城大学教授・麗澤大学院教授を歴任しました)閑話休題。学生運動の中心に近い所にいながらその渦中に飛び込む勇気がついに出来なかったお子様ランチ風な私も、こと異性に関してはそこそこアグレッシブだったことを点描します。

西鉄市電で通学途上、一緒になる特定の女学生にただならぬ

トキメキをおぼえ、彼女もまたそれに共鳴していることを確信していました。そんなある日の夕方、散歩中に、縄跳びをしている彼女に遭遇したのです。

彼女の赤面のカワイかったこと(後でわかるのですが彼女はまだ中学生だったのです)

これで住所はほぼ判明しました。

二・三日後、彼女の同乗を確かめ、六本松を乗り過ごし彼女の学校前で彼女に続いて下車し、定期をみせるようにして(?)降りてくれたお陰でフルネームが確認できました。

数日後、生まれて初めて書いたラブレターを郵送。面会場所は、玉屋文具売場、そのフロアを一時巡回遊するも待ち人來たらず。翌週、ほぼ同スタイルでトライするも矢張りダメ。絶望と屈辱感に燃えた私のアキラメは表層上は意外に早かった。彼女を避けるため、毎朝三十分繰り上げ登校し、二カ月後、箱崎に移ったのです。

話が前後に錯綜しますが、彼女からラブレターの返事が来たのは四年後のようです。

中味を推測すると次のようです。ラブレターを受けた時は中学生だったこと、親に見つかつたこと、やっとな短大を卒業したのでよかつたらお会いしたいということ…。

レ・ミゼラブル!その時私は既に結婚していました。北九州から東京に転勤してましたので福岡の自宅にいた弟が開封し(無礼者!)私の妻宛に回送したようです。その事を一年後、妻

は午前様の続く私に、ある晩、比較的冷静に口にしたのです。この時の複雑骨折にも似たシヨック、筆舌につくしがたいシヨックを今語るピエロをお笑いあれ。

爾來、本件が我が家で話題になることはありませんが、ついに一言も口をかわすことのなかった幻の恋人の幸せをこの場をかりて祈ると言えば気障でしょうか。

紙数の関係で以下は簡単に補足します。

箱崎時代は失恋の怒りと痛みの反動で、新日本文学会で知り合った女性に急接近したこと。彼女の競争率は低くなかったので果敢且つ持続的に攻めたこと。その結果は省略しますが、その時の直接、間接の影響で箱崎の講義にも六割位しか出られませんでした。

ノートは村井忠夫に度々、野崎清博に時々、お世話になりました。

野崎は六本松時代は、自治会活動には無関心且つ否定的な美術部のキャップでした。

保守反動視していた彼とどうして親しくなったのか今でも判然としません。古希を超えた今、スイートホーム(?)の平穏を乱しかねないくされ縁の部分が二人の間になくはないので笑っちゃいますが、彼は今では、枯れた味のある絵を描きますし、町めぐり、史蹟めぐりでは、手づくりのノウハウを蓄積し、地域のVIPとしてブリリアントな余生を送っています。

私は二年前から川柳を始めました。駄句を少々披露し、しめ

と条件を出されたが、格好の物件が無いまま、最後は企業側のご好意もあり金銭買収により解決することが出来た。久保氏には感謝大なるものがあり、川崎支店に私が出来ることをさせて頂いた。その時、久保氏から同期生の集りがあることを聞き、第3回の会(後の「九大にくしん会」)に誘って頂いたことが「九大にくしん会」との出会いとなり多くの友人を得たことを有り難く感謝すると共に、今は懐かしい思い出である。

この話と前後した頃、故谷口清彦氏とも仕事の上で市と公団の立場で相互援助をしたことがある。川崎市では昭和30年前後より急激な宅地開発が続き、特に東横線の西北部でその傾向が強かった。これは市を横断する鉄道や道路などの交通体系が、いずれも東京を基点とする放射線状に伸び、その周辺に宅地開発を促しこの地域がベクトルタウン化してきたことと関係が深い。

そうしたなか、公団では麻生地域で大規模開発を計画していたが、住民の反対が強くと開発の許可を与える市当局としても数年にわたって交渉を重ねた結果、住民の同意を得て良好な団地開発に至った経緯がある。その際公団側で宅地開発後に、市の意向を汲んで川崎市住宅供給公社に住宅団地の建設を認める方針を取って頂くことになったが、これに關係して谷口氏とは数回協議の場をもち、大変なご協力を頂いた。お陰で土地の取得に喘いでいた供給公社としては干天の慈雨となり、私も感謝するとともに面目を保ったことがある。

同じ頃だったと思うが、谷口氏から電話がかかってきた。多

利益を得たと言うものである。

これに対して市長の行政報告、行政による真相解明の約束、議会での対応などあった後、行政からの調査報告に対して疑惑の解明が十分に出来たとはいえないとして、議会の権能において真相解明のための百条委員会が全会派一致で設置されたのである。

百条委員会についてここで詳しく述べることは出来ないが、国会が国政について広範な調査権があるのと同趣旨で地方公共団体の意思機関である議会にも、公共団体の事務に関する調査を行い、選挙人、その他の関係人の出頭及び証言ならびに記録の提出を請求することが出来る権限が認められているのが百条委員会と呼ばれるものである。当然ここでは証人、参考人への出席要請、尋問方法、記録の取り扱い等通常職員が触れることのない事務が発生してくる。当時私は議会事務局の責任者であったことから出来るだけ完全な形で議会のサポートをしなければならずミスは出来ない立場にいたので、法律顧問を置く必要があった。

人選については議会側、行政側から無関係でかつ信頼の置ける人物にしばらく、考えるまでも無く私にはすぐ浮かんだ人物がいた。野田宗典氏である。野田氏とは第三分校以来の友人でありそれまでも会う機会があった。百条委員会の話をすると、初めてだが引き受けてみようかと快く応じてくれた。直ちに業務委託契約を締結。委員会へ出席、法律の解説解釈、専門家として

摩区の一角に、公団の職員宿舎を建設することになったが、周辺の住民から建設反対の運動があり、建設計画が頓挫し担当の課長が参っている。私に住民を説得して欲しいとの内容である。現在でもそうであるが、高度経済成長期からバブルが弾ける頃にかけては、開発によって周辺の住環境が変わることに住民は非常に敏感であった。なかには首を傾げるような反対もあり、そのために建設が著しく遅れる開発も見られた。私はそれまで仕事上、開発行為の総合調整をしていて業者と住民の間にたつことが多く、解決に当たって次第に要領がわかって来ていたので、早速調べてみると反対している住民は以前に別の開発で出会っていた住民である。電話すると公団が住環境を破壊するのはけしからんと言う。私は公団職員といっても勤労者の住宅であり、しかも小規模なので反対の大義が無いのではないかと、その様なやり取りのなかで反対をやめてもらった。公団の課長も大変喜んでくれ谷口氏にも感謝された。数年前、氏が亡くなられたことを知り、人望のある穏やかな人柄だっただけにその死が惜しまれてならない。

昭和63年6月A新聞のスクープ記事が川崎市議会に百条委員会の設置を促し、やがて中央政界、官界などを大きく揺るがせたりクルート事件へと発展していく発端となった。駅前再開発地区に当該企業の進出が決まった時期に企業誘致の責任者であった市の幹部が関連会社の未公開株を取得、導入資金は別の関連会社から全額融資を受け、その後その株を売却して多額の

の助言等を行ってもらった。また、事務局からの法律相談や各種文書の作成依頼に応じ、司法当局等へ提出する書類の作成業務など懇切丁寧、的確な助言を頂き、全国の地方公共団体でも減多に設置されることの無い百条委員会の運営事務を立派にやる事が出来たのは氏のアドバイスによるところが大きいと言ってもいいであろう。委員会終了の都度、時間のあるときは私の部屋でしばしコーヒーなど飲みながら雑談をした事が懐かしい。

九大での4年間は教養部の寮生活の学友と学部に入ってから学友、さらに卒業から20年前後に同期生の諸氏と巡り会ったことが大きな収穫である。なかには顔は知っていたが言葉を交わしたことがない方、顔も名前も知らない方もいたが、すぐに親しくさせて頂いたのは同期の誼ということであろう。特に「九大にくしん会」においてその感が深い。軍隊経験の無い私としては、たとえ4年間とはいえ同じ学び舎で共の学び、寝食を共にした同期生である。△肉親△の間柄と勝手に意味づけ会名にも採用された事に望外の喜びを感じている。

「九大にくしん会」が20数年を経て、なお、その灯を輝かせているのは野村徳夫氏に始まる歴代会長そして事務局長として長期にわたってこの会を支えて頂いた初代村井忠夫氏、現在の川崎靖氏によるところが大きく感謝の言葉もない。勿論会員諸氏の蔭ながらのお力も大きい。これからは文字通りシルバー時代にいった私達の永遠のサロンとして存続することを祈るしだ

いである。

個人的にも親しくして頂いている方も大勢おられるが、本文では仕事の上でお世話になった三人の学友に登場を願った。仕事の中身は当時市にとっていづれも重要なもので、お三方には改めて感謝を申し上げる次第です。



海外こぼれ話

城崎 陸郎

私は会社生活40年の半分、即ち20年は海外関係の仕事に携わり、10年を超える海外での生活経験をしました。その中から幾つかの記憶に残る面白い話を紹介したいと思います。

最初の海外駐在はオーストラリアのシドニーでした。当時(一九六六年)のオーストラリアでの通貨の単位は12 penceが1 shilling, 20 shillingsが1 pound, その他に家賃の契約等に使われ guinea (1 guineaは21 shillings) という単位もあり、10進法になれた私にとっては誠にややこしいシステムでした。しかし私がシドニーに住んで半年後に現在の10進法のドルの通貨システムに変わりました。たった半年の経験でしたが、お金とは毎日縁があるもので変った当座は、10進法に慣れている私にも少し不便が生じたのは、如何に人間が環境に支配されるものかと痛感させられた次第です。当時は度量衡は foot-pound の時代で特に体

と火傷しそうという状況です。ただ回教国であっても飲酒はゆるぎされており、イラク産のシェラザードという名のビールも生産されていきました。イラク人の友人に「回教では飲酒を禁じているのではないか」と聞きましたら、「我々の解釈では酒に酔うなかれとの教えであり、酒を飲むなかれでは無い」という返事でした。そういえば酒臭い息をした千鳥足の酔っ払いに会ったことはありませんでした。

回教国でよく耳にする「イニシャーラー」の言葉は「私の責任では無い、アラアの神の意志です」と一般的には言い訳に使われると考えられていますが、実はそればかりではありません。私の車を運転してくれているジュマ君が、仕事が終わって帰る時に私が「では明日また頼むよ」と言ったのに対し「イニシャーラー」との答えが帰ってきました。私は明日来るかどうかはアラアの神に聞いてくれと言ったように感じましたが、実はそうではなく「神のお助けにより明日も是非来させて欲しい」という強い願望が込められているということが解りました。にっこり笑って「イニシャーラー」と言ったジュマ君の顔が今でも強く私の記憶に留まっています。

香港には一九七八年十月から五年間と一九九一年八月から一年間、通算六年間駐在しました。当時は英国の植民地でしたが、日本の銀行、日本製の食品を売る日本のデパートやスーパーマーケットもあり、生活するには何の不便も感じません。然し一九九一年に再赴任した時は、英国と中国との九十九年間の租借

重は stone, パブで注文するビールは pint となると全く馴染みが無いものでした。現地の人によれば、「通貨単位は10進法の方が便利だとの世論が10年前に起り、今回の改正になったので、今は度量衡の単位もメートル法が便利だという傾向があるので、これから10年後にはそうなるだろう」と呑気な意見でした。因みに現在オーストラリアではメートル法が採用されています。

シドニーから帰国してから二ヶ月後に東バキスタン(現在のバングラデッシュ)に長期出張を命じられました。同じ英語を国語としている国ですが、生活文化に天と地の違いがあります。オーストラリアでは「Thank you」と「Please」は会話の端々に出てきますが、東バキスタンではこの二つの言葉は余り頻繁に使わないようにと先任者から注意されました。英国の植民地として長い間の圧制を受けた国民の悲哀を感じました。

一九七五年にイラクの首都バグダッドへ赴任しました。チグリス、ユーフラテスの大河が流れる古代文明発祥の地メソポタミア平原に位置するバグダッドとは素晴らしい所だろうと想像していましたが、先ず飛行場の到着ラウンジに入るとカビ臭い異様な空気に触れ、飛行場から市内への道路は広漠たる土漠の中にあり、ナツメ椰子の木が点在しているという風景でした。

当時の大統領は革命を成功させたバクル氏で政情は安定していましたが、物資が統制されており生活必需品は欠乏し、外国人の我々にとって住みづらい環境でした。特に夏の盛りには気温が摂氏50度にも上昇し、戸外に放置した車のハンドルを握る

期限が満了し、一九九七年七月一日より中国の主権がおよぶ香港特別行政区となることで、香港居留民の中には不安を感じる人も多数いました。或る程度の財力と技術を持つ人は、カナダ、オーストラリア、アメリカと言った国へ移住することを考えているようでした。

最後の海外でのお勤めとなった台北には、一九九二年八月から一年間住んでいました。台湾とは外交関係はありませんが、台湾の日本側窓口として「財団法人・交流協会」の事務所が台北にあります。ここには日本の銀行こそ有りませんが、日本企業が現地企業と合弁で営業しているデパートや、現地人経営のスーパーマーケットでも日本製の食品を売っており、生活の不便はありませんでした。

台北市内の地下鉄工事は施工中でしたので、市内の公共交通機関の主力はバスということになります。バスの中には老人優待席があり、「博愛座」と呼ばれています。私が混み合ったバスに乗ると若い学生が直ぐ立ち上がり席を譲ってくれます。バス停で二つ目位で降りる時は「私は直ぐ降りるから席を立たなくていいよ」という中国語の言葉を事務所の女性に教えてもらって使うのですが、それでも席を譲ってくれます。優先席と書かれた席に知らん顔をして座っているどこかの国の若者とは大違いです。「博愛座」という言葉に、私が小学生の頃に暗記させられた教育勅語の「博愛衆に及ぼし」の一節を思い出し、日本で使われている「優先席」の表現より適切で柔和な感じを受け

ました。

イラクでは未だに武装勢力のテロ行為で、沢山のイラクの人達が犠牲になっているというニュースを聞く度に、私のバグダッドでの生活を支えてくれた多くの友人の安否が気ずかわれます。最後に一日も早い平和がイラクの国に訪れることを願ってこの話を結びたいと思います。



思い出いろいろ

辻 昌美

小学校卒業後、50年の同窓会には福岡へ帰って、久しぶりの同級生との再会を喜んだものだ。高校卒業後50年には中学、高校を通じて修学旅行をしなかったこともあって、沖縄旅行をすることとなり、全国から馳せ参じ、旧交を暖め、観光に、ゴルフに興じたものだ。とうとう九大卒業後も50年を過ぎて記念の文集をということであるが生来の筆不精、そして切りなるものに滅法弱く何度もパスして後悔したので今回は何とか筆をとった次第である。

まず、大学生活4年間で一番思い出に残るのは、何と云っても六本松の第一分校で過ごした教養部での二年間である。入学と同時に正門から入って右側に部室があった映画研究部に入部した。先輩の土岐さん、吉田さんの人柄もあって、和気あいあ

いたフィルムだったようだ。内容はもう覚えていないが喜劇で結構面白かったと思う。約一千名入って大黒字。打ち上げのコンパは豪華スキヤキパーティーで騒いだのを覚えている。

当時感銘を受けた映画を思い出してみると、

監督・今井正、主演・岡田英次、久我美子

「また逢う日まで」

監督・木下恵介、主演・高峰秀子、小林トシ子

「カルメン故郷に帰る」・日本初のカラー。

監督・小津安二郎、主演・原節子、笠智衆

「麦秋」

監督・黒沢明、主演・志村喬、小田切みき

「生きる」等。

洋画では

監督・ヴィットリオ・デ・シーカ

『自転車泥棒』

監督・ウイリアム・ワイラー

「嵐ヶ丘」

監督・ジョン・フォード

「わが谷は緑なりき」

「黄色いリボン」

監督・マルセル・カルネ

「天上棧敷の人々」

いと楽しく過ごした一年間であった。二年目になると、先輩達が学部へ進学し、リーダーの役が小生に廻って来た。第三分校に入った仲間も第一分校に集まり、部員も急増し、プール横の新部室に移った。女子学生の入部もあって俄然賑やかになった。小さい頃から映画が好きで学校の先生方の眼を盗んでは映画を見ていた。小学生、中学生の頃見た映画で何故か未だに覚えているのは、今川橋の近くにあった聚楽座で見たフランソワ・ロゼ主演の「女だけの都」トグニエル・ダリユー主演の「暁に帰る」である。そのように、映画大好き人間ではあったが、どうも見るのは良いが、その後の批評会などは避けたい方であった。そちらの方は他の部員にお願いし、専ら映画興行の研究を熱心にやった。

人気映画の割引券を映画館と交渉して、後払い精算で部室で売ったり、映画鑑賞会を開催したりした。学部では映写機があり、工学部の学生が機械を廻したが分校にはなかったため、映画館を借りた。日曜日第一回の上映前二時間を映写機、技師付きで五千円で借り、興行した。フィルムは一泊二日でモノクロで3千円、カラーなら5千円であった。新卒の月給が7千円位の時だから結構高かったと思う。市内の高校の映研にもお願いして切符を売った。学部での十円なら無税であったが三十円で売ったので、税務署に税金前払いの必要があった。今でも記憶しているのは本邦初公開の仏映画で「一日だけの天国」を万町の映画館で上映した。興行的に無理ということでオクラ入りして

監督・ジョン・ヒューストン

「アフリカの女王」

監督・ヴィクター・フレミング

「風と共に去りぬ」等々。

NHKのアンケートに回答していたら、後程、角川書店から発行された文庫本「日本映画ベスト二〇〇」を貰った。その志村喬の項に小生の「わが心のスターベストテン」が掲載されていたのに驚かされた。映画人、著名人一千人のアンケートの由、小生も著名人の中にカウントされたいらしい。アンケート回答者一覧によると九大二十七年卒の先輩で亡くなられた宮崎邦次さん（元第一勸銀頭取）の名があった。都銀企画部長会で挨拶したことがあったので感慨深いものがあった。

教養部では勉強せずに、映画と卓球で過ごし、成績は「可卜り線香」が必要な程であった。学部に通って一年半の間は珍しく勉強した。結構、優の数も多かった。今でも残念に思うのは馬場教授のゼミを受けながら、例によって、レポートの切り間に間に合わず、単位がもらえなかったことである。「科学的管理法」は後に製造業の経営に参画した時に役立った。レポートを出さなかったお詫びに、ゼミの卒業コンパには幹事役を勤めた。ゼミの単位は高橋正雄教授の「日本経済論」でいただいたが、先生のゼミで印象深かったのは難しい言葉で説明するなという教えである。社会生活をする上で本当に大切なことを教わったと思っっている。

中学、高校、大学を通じて戦中、戦後の学制改革の過渡期にあったが、良い先生、良い仲間恵まれて、本当に伸び伸びと過ごせたと思う。その後の社会生活でも言いたい事を言い、やりたい事をやって来れたのも学生生活で得たものが役に立ったのではないかと思っている。五十年経っても学部は違っても、同じ大学に学んだ仲間と学生気分付き合えるのは大変嬉しいことである。この良い関係を大切にしたいと思う。昨今である。



リタイヤー10年

野崎 清博

10年前63歳でリタイヤーしたとき、真っ先にやりたかったのは学生時代に経験のある絵画とマンドリンだった。会社のある東京のほうばかり向いて生活していたので、どこにどんな先生がいるか皆目見当がつかなかったが、近所の福祉会館にギターの先生がきているので、そこで聞いてみたらとの情報をえて飛んでいった。その先生からマンドリンは教えられるが、ギターをやってみませんかと誘われて、多少は経験もあるのでぐさま飛びついた。それから10年割と真面目にレッスンを励んでいるがなかなかうまくならない。人前で独奏などはとても無理だが、合奏のメンバーとして年に数回はコンサートに出てハーモニイを楽しんでいる。

ぞれ年3、4回は歩いており、コースも50箇所くらいになった。1コースの距離は大体ゴルフの1ラウンドを目処にしている。だから全然上達しない下手なゴルフはやめてしまった。

「にくしん会」の人達とは平成12年9月に12人で向島を歩き、佐藤君の幹事で浅草の神谷バーのレストランで食事を食べたので覚えておられる方も多いとおもつ。

歴史探訪を趣味とするようになって、いろいろなメリットがあることが分かった。★歴史書中心だがよく本を読むようになった。歩くので体調が非常に良い★だから暇な時は本屋、古本屋、図書館などをよく歩くようになった。★一緒に歩く仲間が増えて、交友の輪がひろがった。★コース案内の話題を広げるために日常のテレビ、新聞、雑誌などでメモを取ったり、切り抜きをしたりすることが増えた等

その中で私が一番大きなメリットを得たことを紹介しよう。私の住んでいる千葉県流山市のそばに我孫子市がある。近いので時々歴史探訪に行っているが、ここは大正時代白樺派の大拠点だった所だ。志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦などが手賀沼の周辺に住み着いて、東京在住組と交流しながら機関紙「白樺」を発行して、文壇の注目をうけていたのである。白樺派の理論的な中心は秀才の誉れ高い柳宗悦であり、新婚早々ながら評論活動と民芸品の発掘に力を注いでいた。だから評論家としての僅かな原稿料と講演料との収入は得ていたが、一定の収入はなく専ら書齋で学究に没頭していた。この生活苦を救ったの

絵画の方は2、3年ほどしてやっとよい先生にめぐりあって、毎週絵画教室にかよっている。通常は水彩で静物を描いたり、スケッチに行つて風景を描いたりしているが、年2回のグループ展と1回の地元流山市展には油絵を出品している。学生時代より大した進歩はないが、思うように描けたときの喜びが忘れられず、せっせと絵筆を動かしている。

会社生活で覚えた囲碁も近所の老人会の囲碁部に入って、ざる碁を打っているが少しも進歩せず、未だにアマチュア初段のままである。

そんな中で一番時間と労力をかけているのが歴史探訪である。まだ在職中の60歳前に、或るグループに誘われて谷中を専門家の案内で歩いてみて、歴史にはとんと無縁だった私でもすっかりその魅力に取り付かれてしまった。早速歴史の本、江戸東京の地図、江戸歩きコース案内などを調べてコース作りを始めた。これは結構時間がかかるし面白い作業なのでボケ防止に大いに役立っていると思う。出来上がったコースを遠慮のいらぬ高校時代の同窓生や会社の仲間達と、わいわいがやがや楽しみながら歩いている。そして歩き終わってからの昼食も楽しみみ大きな柱となっている。地域ごとのグルメの本を数種類調べているが、初めて行つてうまいものを安くで食べられたときの嬉しさは格別である。然し前回好評でせっかく楽しみにして行つた店が閉店してなくなっていると、がっかりすることもある。

歴史探訪を始めて10数年経つた現在、7つのグループとそれ

は妻の柳兼子だった。兼子は三浦環の歌を聞いて東京音楽学校音楽科に入り、本科を終えて研究科に進んでいるとき、宗悦と出会って大恋愛のすえ学校を中退して結婚したのだった。兼子は二人の生活を支えるべく自宅で歌とピアノを教え、月数回は東京に出掛けて公会堂などで催されるリサイタルで歌って収入を得ていたのだった。兼子は後に当時の生活を振り返って、柳の猿回しの猿のように歌つて来たと言っている。生活は苦しかったが次々に子供も生まれ、白樺派の人達との楽しい交流もあり、宗悦もそのうちに東洋大学哲学科の教授となったので充実感があった。

後に「民芸運動の父」と言われ駒場に日本民芸館を創設した宗悦は民芸品を集めるため、よく朝鮮に渡つたが日本の朝鮮支配を批判し、朝鮮の独立を公言していたので私服刑事や特高に徹底的にマークされた。兼子は夫の民芸品購入の足しにするため、朝鮮各地でリサイタルを開いていた。戦前兼子は自他共に認める日本最高のアルト歌手であり、昭和3年にドイツに留学したとき、ドイツ歌曲を歌って絶賛された初の日本人であった。しかし思想的に夫の影響を受けていたので、軍歌は絶対に歌わなかった。だから日本ではあまり発表の場を与えられなかったし、録音技術も幼稚な時代だったので全盛時代の録音盤は殆ど残っていない。

その数少ない歌声を大切に保存しているのが我孫子に新規開設した白樺文学館である。殆どが戦後の50歳を過ぎてからのもの

のだが、お願いすれば85歳までのリサイタルで歌った歌をCDで聴かせてくれる。我々にもなじみ深い「早春賦」「荒城の月」「浜辺の歌」など日本の歌曲も含めて80歳代のものまで聴くことができる。年齢を感じさせない艶やかな美声と丁寧な歌い方は、聴く人を魅了し感激させてくれる。

「皆さん年を取ると歌えなくなるのではなくて、歌わなくなるのでしょ」この年になって今まで出来なかったことが突然出来たり、新しい発見をすることがあるんです」と兼子は生前事もなげに語っていたようだが、年齢に負い目を感じない人である。

最近スポーツ医学専門の先生の講演を聞く機会を得た。先生はご自身で射撃のオリンピックピック選手や監督を務められた方である。「人の運動筋肉のピークは人によって異なるが、それをカバーしているのが鍛錬である。最近の学会では、85歳までは訓練で運動筋肉の劣化を防止できると報告している」とのことだった。私はすぐ柳兼子のことを思い出した。奇しくも兼子がリサイタルで歌ったのは85歳までで、昭和59年92歳で永眠している。私はリタイヤー以後何事によらずうまくいかないし「もう年だから」と簡単に諦めていた。だが今は「85歳までまだ10年以上の年数がある」と思うことにしている。

これが歴史探訪を趣味とした最大のメリットだと思っている。

を温めた。

翌年4月には何となくマネージャーにさせられ、卒業までクラブに打ち込むことになる。佐賀への演奏旅行、定期演奏会等の行事の裏で、寄付金集め、ピラ貼り、ギターローネという国内に幾つも無い楽器の修理の為、コントラバスの大きさの楽器を二人で担いで麴屋番の楽器店まで運んだこと、古い楽譜を整理してスコアを作ったこと、さらに「卒業生を送る夕べ」の演奏会では指揮者の都合で私が棒を振ることになった等、青春の思い出は尽きない。

因みに私が卒業した後、指揮者が辞め、コンサートマスターも居なくなり、クラブは4、5年休部状態になったらしい。

ある時ギターを抱えた女の子が入部してきた。九大医学部付属病院の看護婦という。何かの話から、彼女が私と同じ満洲の同じ小学校で1年下の同窓生であることが判った。同じ街で育ち、引揚者の子供同士、何かと話が合った。

卒業し、山口県の工場に赴任の為帰省した時、たまたまマンドリンクラブの演奏会にぶつかり聴きに行ったところ出演していた彼女に出会った。山口県の勤めになったと話したところ、彼女の実家は隣の市なので今度実家に帰ったら遊びに行くよという事になった。それが家内である。

昭和35年頃全国的にマンドリンブームとなり、私の工場でもマンドリンクラブが出来、夫婦で参加した。昭和52年転職し栃木県に移り、宇都宮マンドリンクラブに夫婦で入り、今なお活



九大マンドリンクラブの思い出

濱地勝太郎

私の家は引揚者で貧しかったが、父はどこからか中古のマンドリンを手に入れてきていた。父は裕福な家庭に育ち、兄弟も多く、子供の時から家の中で合奏をする等音楽的な雰囲気であったらしい。父の若い頃は、土曜日になると職場の同僚数人が我が家に集まり合奏をしていた。父はアコーディオンを担当、タンゴやブルースを弾いていた。そんなことで私もマンドリンを弾くようになっていたが、九大にマンドリンクラブがあることを知り、九大に入ったらクラブに入ることを楽しみにしていた。

今から考えると教養部の時にでも箱崎まで行けば良かったのだが、当時はそこまで考えが及ばず、昭和27年4月工学部に進むのを待ち兼ねて医学部に在る音楽堂の練習場に駆けつけた。

九大マンドリンクラブは大正10年に創部、九大の中では最も古いサークルの一つであったが、私が入った当時は部員も少なく、現役の九大生以外にOBや街の愛好者もいたが、楽器は揃っていない、楽譜も戦前からのものが多量に有り、演奏曲目もオリジナルものを原則としてレベルが高かったと思う。私と一緒に入部した同期生の一人に「にくしん会」の野崎清博君が居り、彼とは昨年の「にくしん会」例会で卒業後初めて出会い、旧交

動している。

昨年九大同窓会で九大マンドリンクラブの関東OBが演奏したことを知り連絡をとったところ、今年九大マンドリンクラブ関東OB同窓会が発足、2月に合奏会と第1回総会をやるというので参加することとした。8月には千駄ヶ谷の二期会会館でサマーコンサートを催すことになり参加した。30名弱のメンバーはS40、45年卒が主流で、私が最年長であった。後輩たちには刺激になったと自負している。

九大での専門は機械加工で、これが定年までの仕事になったが、マンドリンクラブの方は私の生活の支柱となって今も続いている。

〒329-10413

栃木県国分寺町駅東7-2-10

TEL・FAX 0285-44-3114

E-MAIL ML450179@nifty.com



第3分校時代の思い出

林田守生

昭和25年4月久留米市国分町の旧陸軍兵舎跡に出来た九大教養部第3分校に2期生として入学したが、校舎内は草しげり旧

兵舎建物があるだけで、学校と云う雰囲気には程遠いものだった。

住まい探しにも苦勞したが見つからず不取学校側が用意している、兵舎跡に畳を敷いた部屋に入る事にした。そこには先住者2名(自称旧五高出身生)が居り、新たに小生と荻原君が入居したが押入れ等物入れが一切なく、荷物の整理、管理に困った。

◎生活スタート

授業終了後2階の人気のない空教室で友人へ返信待ちの便りを書くのが日課となり、夕食前に同居している先輩の誘いで、校舎裏の畦道を散策し乍ら池に辿り着き、周りの風景を眺め乍ら、ロシヤ民謡を習い合唱した頃はそれなりに楽しいひとときだった。

寮の食事は質量共に満たされる事はなく、夜は散歩を兼ねて荻原君とうどん、ばん等を、食へに行くのが日課で、時々先輩2名が割り込んで、コンパと称して日吉町の屋台まで連れて行かれ、飲めない酒を戻して飲んだら強くなると云って無理やり飲まされ、割り勘支払いで、金もなく何時もヘトヘトで帰った。5月に入って学生運動が次第に激しくなり、その先頭に立って動いていたのが同室に居た先輩2人で闘争目的は忘却の彼方で、知人に問い合わせても戦争反対と叫んでいた様だとの事でしたが事態は進み、ストライキ宣言を発し実際にストライキに突入、たまたま、その日がドイツ語の学期試験日で教室に入れ

て貰えず、成績表は欠点だった事は忘れない。

以後先輩2人とは次第に遠ざかり会話する事もなくなった。忘れられないのは6月25日日曜日昼食で食堂に行った時、朝鮮で戦争が始まったとのニュースを聞いた事である。

夏休み後2学期に出校した時、高校の先輩より借家を紹介され早速入居し、以後は平凡な学生生活を通す事が出来た。



墓参偶感

深田良亮

私は、この連休に里帰りをした。かねてから家内に云われていた、墓参りをするためである。家内は、去年3月、乳ガンの手術を受けたが、その後の経過も良好でとくに問題もないことから、こらで先祖様にお礼参りをしたいというわけである。家内の生家は、福岡の薬院で、実家田中家の墓地は、福岡の古小島にあり、先ず希望どおりにお参りをすませた。

私、深田家の墓地は「福岡県宗像郡神湊」にある。ここが私たち深田家の発祥の地である。今も草深い丘の中腹に昔ながらの古ぼけた墓地がある。墓参りがすんで安堵し何かすがすがしい気分になることができた。

この墓参りには珍しい機会だったので、若松にいる姉夫婦が同道してくれていたが、姉から私たちの祖父である秀三郎さ

んの名を聞いた。祖父の臨終の枕元に並ばされたことを思い出した。私が小学生のときである。その時、祖父が何を云ったか、全く憶えていないが、私たちにはおそらく孫達の行く末を案じながら、何かを語ったことであろう。そしてその時、祖父は、孫達がやがてあの凄まじい戦争の時代を生きることになるうとは、想像もしなかったに違いない。

気が付いてみると、今の私にも、あのころの私くらいの孫がいる。70年余りの歳月が流れた。ほんとうに、ほんとうにいろいろのことがあった。いつもTVにかじりつき、ポケモンとかゲームソフトとかに夢中になっている孫の姿を見ながら、私は、いつも思う。

「この子の行く手にどんな未来が、待っているのだろうか。」



アルバイト物語

藤井 洸

記念文集の模範として示された、伊岐さんの岩田屋物語を大変興味深く読ませていただきました。一寸家を留守にしていたのですが、家内が既に読んでいて、その晩、思い出話が尽きませんでした。

というのも、昭和25、26年頃、旧制福高の寮(新制九大教養部第一分校)に住み、岩田屋のアルバイトとして、玩具、靴、

特売会場などの売り子をしていました。家内はミッシェンから岩田屋に入り靴売り場に居ました。伊岐さんの輝かしい岩田屋物語と違って、こちらはうらぶれた庶民の話です。伊岐さんの奥さんは、多分今少し若い時代かと、思います。我々の成績に不満の会社が男子売り子を廃止したのかもしれない。時間外に催し会場の設営の為、エレベーターの屋根の上に乗って、材木運びをしていたアルバイトも多く居ました。

話がアルバイトから始まってしまいましたので、アルバイト物語を続けます。

工学部に進んで、家内の兄(法学部28年卒、RKB勤務、故人)の友達として、新制福高卒のグループがありました。この連中が呉服町の丸五商事から、アメリカ放出の中古衣料の販売を委託されました。衣料をトラックに積み地方の各都市に行き、その公民館などの会場を借り、販売をするわけです。完全委託というか学生に一切任せられていて、大変な信頼でした。

旅はトラックの荷台の衣料の上、夜は陳列台の上に商品の衣料を上下に被ってベッド代わりです。会計係が儲かったと判断すれば、酒が出て、会場でパーティです。義兄が蓄音機とシャシソンのレコードを持ち歩いていましたので、バリ祭、サセパ、小雨降る径、等々放歌高吟。教養部で独逸語が欠点すれすれでしたので、点数稼ぎにフランス語を少し習ったのが、幸いです。行く先々の喫茶店では、美人ウェイトレスをみつけ

ては、情報を交換し、俺が持てた、わしに笑ったとか、他愛ない競争に真剣になったのも青春です。連中は二八(につっぱち)会と称して、文集を発行している様です。

同窓会拡張の方向もそのような小枝の集約が案外効果的かもしれないと、70歳を越して、そろそろ同窓会的なものを卒業したいと考え、工学部応用化学科の組織である親和会も欠席し様と考えていた矢先応化出の後輩が学長となられ、新しい大学の在り方を求めて、行動されているのを見て感動を覚えました。時あたかも、にくしん会に縁があり、出席させていただくうちに、やはり理科系に無い一つの人間的な営みが感じられる様になりました。

平成16年10月卒業50周年記念の同窓会が福岡で催され、宿泊地の唐津に向かう途中、九大の新しいキャンパスを見学しました。九大御殿と称せられる豪邸の立ち並ぶ中、広大な敷地にゆたたりとしたペースで建設が進められていました。民間企業では考えられない事業です。又、先日九大の研究発表会が催された大手町のKKR(国家公務員連合)ホテルもゴージャスなものでした。国立大学を出て、民間企業に勤めた者として、国家権力を背景に持つものと持たざるものとの較差の大きさに驚くばかりです。

九大が新しい方向に進み、民間との連携を深め様との動きは立派なものだし時節に合ったものと思います。その中で、"にくしん会"の協力姿勢は良いと思います。

所めぐりという訳です。

従って、札所では略式の合掌札拝だけで納札も納経帳もなし。記録として山門と本堂をカメラに収めただけです。動機が不純?で参詣も手抜きで、一般の敬虔なお遍路さんからは叱られそうです。

② 10年の初回・初体験の疲労

徳島県は鳴門市の一番札所霊山寺から第一歩を踏みだしましたが、三日目ぐらいから夕方宿に着くと腰・膝・足に疲れがドツとふきだし、何かに掴まらなければ立ち上がれない状態でした。その上、足の裏がカッカと火照り、水で冷やしても収まりません。(原因は足に馴染みのない重い登山靴でかなり早いペースでの長時間歩行―勿論2回目からスニーカーにかえました)明日はもう歩けないのではと心配しましたが、翌朝目覚めた時にはその疲れと火照りはウツミたいに回復しているのには驚きました。生命力の逞しさというか回復力のすばらしさを実感し、いささか若さ?に自信を持った次第です。

次は歩行中の水分の取り過ぎ。平地でも一時間近く歩くともう上半身汗ビッシヨリで特に晴天の日は喉が渇く・水を飲む・汗が出るの繰り返しでした。気がつくとも朝から夕方まで小便が全然出ない日があり、これも初体験。実はひそかに道中禁酒を誓っていましたが、水分補給にかこつけて第一日目から破られました。

もう一つ、自分では意識していませんが立ち上がりの緊張感

古い先短い者の同窓会に関する対処の仕方として、にくしん会の在り方は、非常な示唆に富むものとして尊敬をおしむものではないと思います。

これからの交流を通じて、いろいろの教えを賜りたいと思うと共に会の益々の発展を祈ってやみません。



私の歩き遍路

藤井潤一

私は平成10年から12年にかけて3回、乗りものは一切利用せず自分の足だけを頼りに、四国八十八ヶ所の札所めぐり―いわゆる歩き遍路を体験しました。その時の思い出の一部を綴ってみたいと思います。

① 動機―ウォーキングの延長

普通四国巡礼を思い立つのは信仰によって心の安定を求めるとか、或いは自分を見つめ直すといった宗教・哲学的な動機からだと思います。私の場合はその様な事情は全くなく、ただただ八十八のお寺をつなぐ道を"歩く"のが目的でした。私は昭和50年頃から運動として、手軽で体にやさしいウォーキングを続けていました。会社勤めからの解放を機に、まとまった距離を長時間歩いて、自分の体(脚)力を確かめてみたいという気持ちからです。それとヒマつぶし。その格好な場所が四国八十八ヶ

と極度の疲労で、空腹感はあるが二、三日は昼食が殆ど喉を通らなかつたこと。(帰宅時5kg弱体重減)

この様な立ち上がりの試練を乗り切り最後まで歩き通すことが出来ました。未知の地をガイド・マップ(わかりにくい)と遍路用の道標をたよりに歩く訳ですから、道に迷わない様にと、いうプレッシャーが終始大きなストレスでした。歩行記録は別表のとおりです。

③ 歩き遍路の三つの関心事

これは人間が生きていく上での生理的欲求・機能で、歩き遍路に特有のものではありませんが、最大の関心事は"寝ること"即ち宿の確保です。(野宿する勇気があれば別ですが)自分の一日の歩行能力に見合った所にうまく宿があるとは限りません。このため一日の歩行距離はかなりバラツキが生じます。札所の宿坊、民宿(へんろ宿)、都市部ではビジネスホテルも利用できます。へんろ宿は設備面は大差ありませんが、食事の方は様々ですが余りヒドイ場合は次回から敬遠することになります。大半は好人物のおかみさんが暖かく出迎えてくれます。ただ、この世界も高齢化と地域の過疎化が進み、廃業する宿も多く宿泊の確保が懸念されます。

二つ目は"食べる"ことです。素泊まり宿以外は朝夕二食付きですので、昼食が問題です。前述の宿と同様に丁度正午前後にうまく沿道に食堂がある場合は少なく、不規則な食事を強いられます。山間部、僻地ではそのチャンスは全然ないので、前

宿で握り飯を用意してもらい持参することになります。

三つ目は「排泄―大きい方」で、私にとってはこの最大の課題でした。私は毎日定期に排便の習慣がなく加えて神経性下痢症？気味で、日中の歩行中にも便意を催すことが時々あるからです。町中ではガソリンスタンドで借用しましたが、喫茶店や公共施設にも大変お世話になりました。極めつけは恥も外聞もなく、青空トイレの貴重？な体験もありました。

④ お接待―心の贈りもの―

白衣に金剛杖の出で立ちで歩いていきますと、沿道の人達から様々なモチナシ「お接待」を受けることがあります。私も果物、菓子、飲み物、小物入れのほか現金のふるまいを有難く頂きました。一万円弱の現金は今も記念に保管しています。食事の接待も善根宿といって宿泊のお接待もあります。真心の贈りものです。

愛媛県西条市で一人のお婆さんから、自分が食べようと買ったばかりの二切れの焼芋を「気をつけて行ってください。どうぞ」と言いながら差し出された時には、思わず胸が熱くなり目頭を押さえました。

お接待ではありませんが、道中すれちがった登校中の小・中・高校生達の「お早うございます」の挨拶は、本当に気持ちの良いもので大変元気づけられたことを覚えています。

⑤ 歩き終えて

四国遍路の旅は人の心の優しさ、いたわりの気持ちに触れさ



ペルー出張の思い出 ―親孝行の少女に感動―

星子 昭 磨

まづ、にくしん会の皆さんに、ご無沙汰のお詫びと、例会出欠の、我がままのお詫びを申し上げます。私の「変形性膝関節症」も、色々な治療のおかげで、歩行困難にならずに終わりそうです。皆さんにご迷惑かけないよう治療に専念いたします。さて、にくしん会の記念文集に留めおきたいことは、大小たくさんありますが、海外に出張したときの強烈なおどろきと、感動こそ、第一級のものと思います。即ち、海外（発展途上国）の空港に着いてから、帰るまでのめまぐるしい内容、即ち感動の連続の一部を紹介させていただきます。この文集の出張は「インカ帝国の秘宝展」の時の「ペルー」です。

A、ペルーの空港：山の谷間にあり、無事着陸した時は、神にお礼を云いました。

B、ペルー市内の宝くじの賑わい。

見上げる大看板に当選の数字。毎日のように当選発表。

C、ペルーのタクシー。「外觀はフォードのような高級車だが、車内の付属品は、完全に盗まれて、何もない。ドアも、ともに閉まる車は少ない。「車検はなし。」アメリカで使い古した車で、陸路（アメリカン・ハイウエイ）国境を越えて。

せてくれました。都会生活で忘れていた人の情けを思い出させてくれました。これが人々を二度・三度と遍路の旅に駆りたてる理由の一つかと思いました。

	NO1(平成10年)	NO2(平成11年)	NO3(平成12年)	
所要日数 (区切り)	35日 (10日×2回, 8日, 7日)	36日 (18日×2回)	36日	
歩行距離	1.130km	1.120km	1.110km	
一日平均	歩行距離 (最短～最長)	32.2km (19.1～40.1)	31.1km (17.9～38.1)	30.8km (20.5～40.5)
	正味歩行時間 (最短～最長)	6h46m (4h24m～8h37m)	6h39m (3h09m～7h55m)	6h04m (3h45m～7h43m)
	歩行速度 (最小～最大)	4.66km/時 (3.30～5.46)	4.93km/時 (4.00～5.52)	5.07km/時 (4.15～5.63)
	非歩行時間 *1	1h45m	1h56m	2h15m
	総所要時間 *2 (最短～最長)	8h31m (5h35m～10h30m)	8h35m (4h54m～10h05m)	8h19m (5h25m～10h11m)

*1 参拝、休憩、昼食の時間

*2 正味歩行時間+非歩行時間 (即ち、朝宿を出て夕方宿に着くまでの時間)

D、ペルー市内の交叉点。信号待ちをしていると、どこからともなく現れた子供の物売りに半ば囲まれる。宝くじやガムなど。

E、山岳鉄道(軽便鉄道)ペルー駅→マチュピチュ駅機関車(弁慶号)も客車(日本の幹線で使用したもの)も日本製でおどろく。

ウルバンバ河(アマゾンの水源の一つ)に沿って走る。

F、列車が駅(平らな草地)に着くと、どこからともなく物売りが表れる。山高帽をかぶりとうもろこし等を売る。

G、親孝行な少女。ペルー市内の、とある路地で。あどけない少女が、一生懸命、鶏の毛をむしっていました。日没になるまで、朝からむしっていました。聞くと親の手伝いとのこと。強烈な印象と感動でした。賃金は、わずかと聞いています。

H、夜学の小学生

或る夜、小高い山の上から、小学生の一人が下りて来ました。昼間は親の手伝いで、学校に行けない生徒の一人でした。明るい小学生達で感動しました。30～40年前のペルーが、そのエネルギーで、すばらしい発展途上にあるということです。楽しみです。

私達は、たっぷり働いてきた人間です。従って一期一会を大切に、堂々と遊びましょう。老後の生きがい、「楽しみ」「喜び」

「思いやり」と共生して。見方を変えて、人生を四季にたとえれば、私達は、秋が深まったと見て、これからは、収穫の時です。即ち、人生のうちで、一番豊かで充実して、自由で楽しい日を送れるとき、「ダイヤモンドエイジ」の始まりです。5年前、私達は、多くの人々に生かされて、2000年を迎え、日本は世界一の長寿国にもなりました。一方、この地球は、60億人が暮らしていますが、その内、30億人は空腹です。この現実を直視して、考えなくてはなりません。

最後に、私が断片的に拾った言葉の一部又心に残したい文章の一部を書き加えさせていただきます。

イ、我以外皆我師(吉川英治)

ロ、人生は悲しみが多い程、やさしく出来る。

ハ、円満な家庭の料理が、一番おいしい。(村上信夫)

ニ、幸は、いつも自分の心が決める。(相田みつを)

ホ、家族が集まる時間がある。それが本物の住まい。

四季を感じられる家が、自分にとっての絶対条件。

団らんは住宅の基本機能、父親の求心力ある家庭を。

(以上は、浅田次郎氏2004年1月1日の日経より。)

へ、受けて忘れず、施して語らず。

ト、奪い合えば、足りぬ、分け合えば余る。

チ、一笑一若 一怒一老



私の「九大物語」

星山芳幸

はじめに「九大とのかかわり」

早世した父は熊本の水俣市で耳鼻科の病院を開業していた。母は私を医者にしたかったのであろう。父の死後すぐ福岡へ転居した。母の頭の中には「九大医学部」へ私を入れたい気持ちがあったのだろうと思われた。

福岡で、母は下宿屋をしながら生計をたてた、その下宿人の中に「九大学生」が何人かいたがハッキリ憶えていない。

高校で大学受験のとき、初めて「九大」の存在を意識する。

幸い「九大」へ入学、六本松の「第一分校」へ通学していたとき、私のアルバイト先である岩田屋宣伝課の依頼で「アルバイト学生」の募集を厚生課にお願いした。その時の仲間が今の「九大にくしん会」の母体となっている。又仲間の一人である野崎さんの関係で三菱信託銀行に入れたのも有難い縁であった。

7年前、福岡へ出かけたとき、杉岡前九大総長との出会いで「九大」並びに「九大東京同窓会」との「かかわり」が出来た。

「九大東京同窓会」について

平成10年10月16日、西鉄グランドホテルで行われた九大法学

部同窓会の総会に出席した際、当時の布江会長(29年法学部同期)から杉岡前九大総長を紹介され「東京地区」の全学部の横断的同窓会設立構想を知らされた。その時『最近の学生は地元の職場を望み、東京、大阪の会社を敬遠し勝ちである。このような風潮が続けば九大の将来が心配である。早く強力な東京同窓会を作り、学生の尻をたたき、励ましていただきたい』と話されたので、「九大にくしん会」のことを説明した処、即座に『その「にくしん会」を中核に是非東京同窓会を立ち上げていただきたい』と要請された。これが「九大東京同窓会」設立の「きっかけ」となった。

同年11月の「法学部東京同窓会」に再度杉岡総長とお会いしたとき九大法学部東京同窓会の田坂事務局長を紹介して頂く。それまでは余り九大の同窓会に関心がなかった私も杉岡総長との約束を果たすべく色々と具体案を考えた。一番困ったことは、工学部には合同の同窓会が無かったこと、理系は「学科」単位同窓会組織になっていること等わからないことが多かった。さいわい「にくしん会」の理系、その他の方々の協力を得て九大の同窓会の全容が浮かんできた。註①

まず、法学部主催の集まりとして「新年会」を開催(平成13年1月13日於学士会館)その後、経済学部のほか、他学部の同窓会も参加し、6回の会合を重ねた。参加者は次第に増え、150名を越えるまでになってきたので、正式に、設立総会の準備会を開催することとなり、梶山総長との懇談会をもった(平成

15年8月6日)。九大東京同窓会の初代会長に、全日空会長の近藤さんを選出した。又各学部から推薦された幹事で会則の作成等準備を進め、平成16年5月14日、経団連ホールにおいて設立総会を開催、全員の承認を得て新しく発足した。当日は予想を上回る250名の参加があり大盛況だった。杉岡前総長から私にもお礼とねぎらいの書状を頂き、それまでの疲れも一度に吹っ飛んでしまった。

積極的に同窓会活動に参加を希望する登録会員も9月8日現在で446名となった。当面の目標は一、〇〇〇名を目指したい。

「九大東京オフィス」東京丸の内に決まる

世界を目指す九大も、昨年から独立行政法人となり、競争社会に入った。他大学に負けないためにも世界の情報が集まる東京に拠点を設けなければならぬ状況になった。私が不動産の仕事をしていることを知った藤吉総務課長は町田まで出てこれ「東京オフィス」を探すべく要請を受けた。日本一のビジネスセンターである丸の内エリアを薦め、現在の三菱地所のビル(丸の内八重洲ビル)に決めて頂いた。

「東京同窓会」の必要性について

私立の各大学は古くから強固な同窓会組織を持っており、先輩、後輩の温かい関係が羨ましくて仕方がなかった。九大も東

京に強力な立派な全学部同窓会が出来れば…と想っていた矢先、今回の話が持ち上がった。そこで私も前向きに取り組んできた次第。

「参与」について

強力な同窓会にするには強力な方に同窓会設立について賛同・協力・支援して頂かなければならないと考え、上場の有力企業のトップ又はトップクラスの方々へアプローチを続け、役員（参与）に就任して頂くことになった。註②
理事会で参与選出の担当となった私は昨年12月28日、最後の方の参与就任の承諾の電話を頂き、梶山総長に報告したら大変喜んでいただいたことが忘れられない。

「私の初夢」

「九大共和国」の独立、夢の中の組閣人事

○梶山大統領 ○近藤総理大臣 ○増田副総理大臣 ○古川官房長官
○田坂副官房長官 ○黒田法務大臣 ○荒谷文化芸術大臣 ○高岩芸能大臣 ○内堀スポーツ大臣 ○福岡経済通産大臣 ○片山厚生大臣
○江本資源エネルギー大臣 ○岡野海運大臣 ○濱崎建設大臣 ○岡部運輸大臣 ○古川貿易大臣 ○箱島情報通信大臣 ○泉国務大臣 ○池田食品大臣 ○堀川食糧庁長官 ○渡辺国務大臣 ○藤井少子化対策大臣 ○自見国務大臣 ○安東医学庁長官
註①松田さんから「親和会」応用化学。岡さん、城崎さんから「壬土会」土木、稗田さん（高校同期）から「東京九機会」機



私の学生時代

松田健三郎

私が九大を受験する事を心に決めたのは、学制改革で近くの加世田高等学校が新制高校になり、旧制川辺中学から集団で編入した2年生の頃であった。それまでは大学に進学するには第七高等学校造士館（旧制高校）に入れなければならなかったから、経済的にも、兄弟8人の家庭では余裕もなく（親は直接には言っていないが）一刻も早く社会に出て自分の道を志向しなければならぬ宿命にあったと自覚していた。そのためには、どうしても専門の技術を身に付けなければならない。体力には自信があったので、直ちに実社会への道はあるにはあったが、やはり上級学校で教育を受ける事を周囲も期待していたし、私の希望でもあった。そこで明治高等工業専門学校（現・九工大）か熊本高等工業専門学校（現・熊大）を目指そうと準備をしていた頃に、大学にも変革があり、新制高校から受検できるとのニュースが流れたのだ。それならば腕試しの積りで受験してみようと思ったのだった。

九大受験の時は、警固町に居られた野村徳夫君（川辺中学・同級、にくしん会イニシエイションメンバーの一人）の家（父君は当時三和銀行の福岡支店のお偉いさんであった）に泊めてもらって野村君の案内を頂き、迷わず受験できた。幸運にも希

械、伊岐さんから「松の実会」九大女子同窓会、「箱崎会」、井上さんから「乙猷会」情報通信

註②

○黒田節哉 28法 弁護士
○荒谷俊治 28法 町田フィルハーモニー常任指揮者
○高岩淡 29経 東映会長
○内堀丈二 30法 九大野球部OB会「九球会」会長
○福岡道生 30経 健康保険組合連合会会長（元日経連専務）
○古川貞二郎 33法 元内閣官房副長官
○片山仁 33医 元順天堂大学長
○江本寛治 33工 〔元〕ホールディングス（株）会長
○岡野利通 34工 元三井造船（株）会長
○濱崎泰行 35経 （株）デイ・シイ会長（前第一セメント）
○岡部正彦 36法 日本通運会長
○古川洽次 37法 三菱商事常任顧問（元副社長）
○箱島信一 37経 前朝日新聞社長
○泉信也 37工 参議院議員
○池田弘一 38経 アサヒビール社長
○堀川征孝 39経 日本製粉社長
○渡辺具能 39工 衆議院議員
○藤井龍子 44法 大阪大学招聘教授
○自見庄三郎 45医 衆議院議員
○安東恭助 59齒 ニコニコクラブ理事長

望がかない、昭和25年4月久留米の2分校で理系の学生として寮生活が始まった。当時は未だ戦後の混乱が残っており、米穀手帳を持ち歩かなければ食事に有りつけない状況であった。朝は何を食べたか？記憶にない、昼はコッペパン1個と粉を溶かしたジュース、時に素うどん、夜は僅かに米の入ったご飯と味噌汁に少々のオカズといったものだった。しかし、オカズに塩鯨の料理がよく出た事は、今に思えば栄養的に良かったのだろう。寮生活では、G氏を始めとする教宣活動が連夜開かれたり、腹を空かした愚連隊？がオコゲを見つけて騒いだりしていた。ツリンケンで大声を出しながら、寮雨を堂々とする者など、勉強をする雰囲気としては決して良好な所では無かった。それでも意思さえあれば、勉学の時間はあったし、色々な人々を知る機会でもあった。最初の夏休みの後は、筑後川河畔の自炊部屋にO氏と共に暮らす生活にした。学食中心であったが、土、日は市場から塩鯨と野菜を大量に買い込み、ビタミンDと称して栄養補給をしていた。時々、の呑み代と遊び代は、アルバイトで稼いだ。日本ゴムで使ったカーボン・ブラックの空袋から、残りを叩き出して回収し、膳写用インクの原料にする作業は、風呂に入っても2、3日は皮膚から抜けなかった。久留米の中心部でのサンドイッチマンを柔道部の猛者連とやったりもしたし、専ら体を使う仕事で稼いだ。

本学に移ってからも、学生食堂を拠点としながら下宿は転々とした。多々良の家では、4人の学生が2部屋に居た。私と同

室のT氏（造船学科）には、学生運動家から、その筋の本（地学、生物学など）が届けられて来ては誰かが取りに来る、彼自身も迷惑がっていたが、彼の兄（東大生・全学連幹部）からのものであってみれば無碍にも出来なかったのだろう。別の部屋の一人H氏（文学部）は女性関係で、心中未遂をしかしたりして、大騒ぎした事もあった。兎に角、出来るだけ多くの人々と知り合いになり人生勉強を！という考えを持っていたので、騒動には巻き込まれず、次の下宿探しにも精を出した。私が卒業前1年間、お世話になった家は、松本治一郎氏（社会党左派の代議士、松本組の代表）が、建設現場で出る廃材を利用して大学の近く松原に建てた苦学生のための学生寮（寮費タダ）であった。8畳間に、弟、史郎（政治学科）とご厄介になったが、これを耳にした同郷の後輩達（同じ境遇）が押しかけてきて同居を迫るので、馬出に在った松本治七さん（治一郎氏の弟、管理人）に許しを乞い、5人の同居となった。此の頃の私のアルバイトは、家庭教師であったが、天神の近くで瀟洒な家に住んでいる母子家庭の小学5年生の娘の土、日だけの担当であった。（時々見かけた恰幅の良い紳士は炭鉱の社長。黒ダイヤの時代）良くしてもらいアルバイト料も良かったので、同居人達とのコンパの糧に大いに役立った。この様に多くの方々にお世話になり、何とか卒業する事が出来、日本鉱業（現・新日鉱HD）で44年余の会社生活を送らせて頂いた。私達の時代は、まだ学歴社会が色々な所で色濃く残っており、九大の名を売って過した男と

言われそうで、自責の念を禁じえない。
九大が新たなキャンパスに移り新たな発展を期している姿に、これからの九大生に大いに期待したいと思う。

（29年応化卒）



中国で六年半も日本語教師を務める

光吉正邦

光吉正邦さん（73）は定年退職の前から、リタイアしたら中国で日本語教師のボランティアをしようとして設計していた。退職の一年前からは、自宅近くで毎週土曜日に中国語を習い始めた。一九九一年八月、37年間務めた日本IBMを60歳で定年退職すると、10月から、東京、本郷にある日本語教師養成校に通い始めた。通学時間は片道約一時間。午前9時から午後3時までで、30人ほどのクラスは若い女性が多く、「おじさんは一人だけ」だった。

日本IBMは「よき企業市民」として、社会貢献活動に取組むことで知られており、教育、科学技術、社会福祉、社員ボランティア活動などを支援している。光吉さんも40代から、東京、武蔵野地区のボイスカウトのリーダーを勤め、障害を持つボイスカウトのキャンプなどを支援してきた。会社では営業、人事畑を歩き、地域福祉マネジャー時代は、本社のある東

京都港区の肢体不自由児・者の在宅介護支援も経験していた。

だが、「人使いの荒い会社」でもあった。マネジャーになったら残業続きで、土曜出勤もしばしば。自分の時間がなかった。働き蜂のような先輩の姿を見ていたから、定年後に子会社や関連会社に行くといった先輩たちとは違った道を歩むことにしていた。

定年を控えた時代は、バブル経済の終りのころだった。料理をすることやお酒が好きだったから、一時は相続した福岡市内の実家を利用して飲み屋を始めようかと思つた時期もあった。そんなころ「家内と娘は、水商売はやさしくないよ。中国で日本語の先生をしたら」と勧めたのです。その言葉が、心のなかで思っていた自分の道を歩む後押しになった。

定年後の12年、半分がボランティア

「定年になって12年、そのうち6年半は中国の4ヶ所で、単身赴任で日本語教師のボランティアをしていたわけです。定年退職後の生活としては充実していた日々で、友達にもうらやましいと言われますね」

光吉さんが「充実した日々」と語る中国での生活がはじまつたのは、1992年8月だった。通っていた日本語教師養成校の要請で、中国東北部、遼寧省にある大連市の大連管理干部学院へ日本語教師として派遣された。3年制の大学で、研修という名目だった。9月の新学期に間に合うように8月25日に日本

を發つた。61歳の誕生日の前日だった。

大連市は、東北三省の物流の窓口として発展している都市で、人口は590万人。旧満州時代には日本人が多く住んでおり、アカシア並木でもしられている。

養成校からは毎月、授業の内容や生徒の反応など実習レポートの提出が求められた。「実習のための費用として80万円ほどを払いましたが、今から考えると紹介料なんです」。「お金をはらって、ボランティアをしている感じ」がして、養成校とは縁を切った。1994年7月にいったん帰国したのだが、学院から引き続き担当してほしいとの依頼があり、1995年9月から97年1月まで教鞭を執った。

学院側から教科書が指定され、1年間に教える内容についての指示があった。副読本については学院側と相談して決めた。授業は1コマ90分。日本語の教科書に従って、生徒に読ませることから始まった。

日本語を教えるのが本来の目的だったが、「ビジネスについて話をしてほしい」と頼まれることもあった。日本IBM時代に造船、製鉄、電力、ガス、流通など多様な部門を担当した経験が生きてきた。「日本語の延長線」として貿易実務——見積り、入札、契約、手形、海上輸送、航空輸送、日本経済読本なども教えた。

個人ボランティアではあったが、学校からは毎月5000元（約7500円）、任期の最後の方は2000元の手当てが出た。生

活ができる程度の金額だった。飛行機代は自分持ちだった。

市場のおばさんとも知り合いに

中国語との出会いは、旧制中学時代だった。1、2年の時には、「子曰わく……」「友あり遠方より来たりて……」などの漢文を習った。大学では1、2年の時に第3外国語として中国語を履修していた。

「言葉は全部忘れていましたが、魯迅、老舎などの著名な作品は読んでいたので、古典の素養というか、中国文学に対する手掛りがあったのは助かりましたね。大連では、高校生の国史や世界史の教科書も読みました」

自炊したいと申し入れたら、小さな台所がある教員宿舎が準備された。

「ご飯をたいて、豆腐とワカメの味噌汁をつくりました。半分が日本風、後は中国風の炒め物。お世話になっていている中国人の先生や学生を招待するときには、すき焼きてんぷら、湯豆腐なども作りました。漬物も自分で作りましたよ」

これまでに何人もの日本人の日本語教師と付き合ったが、自炊をする人は少なかった。「それに比べると、僕の方はとてもぜいたくな食生活でした。市場へ買物に行き、おじさんやおばさんとも知り合いになりました。その後も中国へ行くくと市場へ寄りますが、「いつきたのか」などと声をかけてくれますよ」

今では生活や旅行するのに不自由のない北京語が話せる。「地

で、上海から100キロのところにある江蘇省南通にある農業高校へ赴任した。

「1年と思って準備をしていたのに、出発の2週間前になって、1カ月と言われました。でも、断りようがなかったんです。中国人の先生に日本語教授法についての注意点と部分的に教え方のノウハウを伝授し、用意していたテープや教材を置いてきました」

さらに2003年9月から2004年2月まで、南部にある浙江省の職業高校へ。「高校生60人相手は、恵まれた大学での教壇とは違って辛かったけれど、中国の高校の実態がわかったのはよかったですよ」と、ポジティブに受け止めている。

あきさせない授業のコツは「ほかの先生とは違う特徴を出すこと。質問には大きな声で答え、話を面白くすること」。そんなときにこそ、さまざまな人生経験が生きてくるし、シルバー世代がボランティアとして活動する意味合いがあるのだと思わせる言葉だ。「教室から笑い声が出て、うまく授業が進んでいると、時間が足りないと感じますね」

教え子との交流続く

日本語教師を目指す人へのアドバイスを聞くと、「日本人だから、日本語を教えられると思うのは間違いです」と言い切った。語学教師になるには、音声学から教授法まで基礎を身に付けることや、教案の作成方法などを学ぶ必要があることを挙げて、

元の人たちは、ほかの地域から来た中国人だと思っていたようでした」。服装も中国人と同じような格好をしていたし、お酒も量り売りの店に買いに行った。地元で溶け込むことが、生活を楽しむ秘訣のようだ。

大連は大陸性モンスーン気候で、四季がはっきりしている。夏は暑く、冬は寒い。氷点下10度くらいになる日もある。外出時にはダウンジャケットを着込まないといけない。「そんなに寒さは感じませんでした。まだ60過ぎだったから、気が張っていたんでしょね」

高校でも教壇に

1997年1月に大連から帰国した後、日本シルバーボランティアズに登録した。日本語教師としての経験を、もっと生かしたいとの思いからだ。

その願いはすぐかなった。英語科だけで10年間実績がある蘇州の蘇州医学院から日本語科を新設するため、日本人教師を派遣してほしいという要請が来たのだ。1997年9月から99年7月まで赴任した。

これも3年制の大学。医学部には入れなかったが、新設の日本語科で学ぼうという学生ばかりでやる気いっぱいだった。飛行機代、保険料などはシルバーボランティアズが負担してくれた。

続いて2002年9月には、シルバーボランティアズを紹介「通信教育か、養成学校へ通うのがいいでしょう」
教え子との交流は今でも続いている。先生と学生という関係から、国境を越えた祖父と孫のような付き合いに発展している様子話す光吉さんは実に楽しそうだ。

「大連時代に最初に教えていた学生が結婚して商社に就職して、名古屋にすんでいますね、ほかの教え子は昨年、国費留学で東京に来て、家へ遊びに来ました。蘇州医学院の学生は日本に留学して別の中国人留学生と結婚。卒業論文は源氏物語と言っていました」

感謝の気持ちを込めて、蘇州医学院の先生一人を2週間招待したこともあった。個人が中国人を招くには手続きが煩雑で、外務省へ戸籍謄本や収入証明書などの書類を持って何度か出掛けた。蘇州の先生も政府の許可、パスポートの取得、ビザの申請などかなりの時間がかかった。「地道で、実のある日中交流をしていると思いますよ」とその言葉は自信に満ちていた。

光吉さんに中国行きを勧めた奥さんは、夫がボランティアとして中国で過ごすことや、教え子が遊びに来ることには協力的だ。家族の理解と協力があったからこそ、計6年半も中国の地でボランティアができたのだろうと思った。「家内が赴任中に遊びに来た時に、先生より中国語が上手だとほめられていました。緊急に日本教師が必要になったら、行ってもいいと話しています」

定年後の12年を振り返った感想は「中国人との付き合いは

財産になりました。中国に関する理解も深まりました。日本語教師の穴が空いたら、ピンチヒッターは務めますとシルバードラントニアズに言っています。73歳になった光吉さんは、生涯現役を目指している。

(この記事は、「シニアのための国際協力入門」、いきいきフォーラム2010編、明石書店発行。その中でボランティア活動の実践の事例として、幾つかのケースの一つとして紹介されたものです。インタビューは元共同通信社、編集・論説委員、西内正彦氏によるもの。)



筆跡が乱れた一通の手紙

村井忠夫

かつてあれほど片時も頭を離れなかった「にくしん会」の例に顔を出さなくなつてから、いつのまにか数年が過ぎました。いい加減になつてしまい申し訳ありません。いくら気にしたところで、顔を出さなければ「いない者がいない」状態は紛れもない事実ですから、「顔を出さない言い訳」ぐらいのことしか書けません。そんなわけで何を書くか思い迷っていたある日、Z君からの封書の手紙が届きました。封筒の表書きの筆跡がかなり乱れているのが、一瞬気にかかりました。最近はどう連日やりとりするメールのおかげで手紙がめつきり減っているだけに、

とりわけZ君からのその手紙は目立ちました。Z君はもう20年以上前に上京の都度何度か「にくしん会」の例会に顔を出したことがあるメンバーですが、現在も福岡に住んでいます。私とは高校がいつしよでしたから年賀状とか暑中見舞い程度のやりとりは続けてきましたが、詳しい近況は知らないままでした。そんな状態が続いてきた中で久しぶりに読んだ文面は、半年ぐらい前に、母上が亡くなられたときに送ったお悔やみ状とお香典への礼状でした。しかし、単純な礼状ではありません。型どおりの書き出しで始まったその手紙は、だんだん型どおりではなくなり、書き進むうちに思い浮かぶいろいろなことをそのまま書き続けていったような感じでした。読んでみてわかったことが、いくつもありません。最も胸をつかれたことは、Z君が一昨年脳梗塞を患ってから字を書くのが大変難しくなってきたということでした。封筒や手紙のただごとではない文字の乱れは、それで十分に納得がいきました。たぶん長い時間をかけて書いたであろうその文面は、7枚に及びました。

Z君は、母上の思い出を書きながら学生時代のことをあれこれ思い出したに違いありません。不自由な手で、書いては手を休め、休んではまた書き続けたと思われるその手紙の最後にはこうありました。「…字を書くのに骨が折れるのは事実ですが、この問題を乗り越える積もりで近いうちにパソコンの使い方を覚えようと本気で考えています。…」 たった数行のこの言葉

が、しばらく頭を離れませんでした。字が書きにくくなったという事実を率直にうけとめて、なお、何かを語ろうとするZ君の意欲に感動しました。こうだからこうでなければならぬといった理屈ではなくて、ごく自然にそういう気持ちを持つようになっていくZ君が自分と同じ年齢であることに、何か不思議な感動を思えました。驚きを覚えました。そして、何か励まされたような気持ちになりました。

その日すぐ、Z君への返事を書いたの言うまでもありません。長年使っているパソコンではなくて、便せんに手書きで書いたのはもちろんです。(2005.8.20.)



インドネシアの歌を唄う会

山浦よしのぶ

突然ですが、皆さんは「イスマイル、マルズキ」と言うインドネシアの作曲家の名前を聞いたことがありますか、少しでも聞き覚えの有る方は相当なアジア音楽に関心の有る方です。アジアでは「インドネシア賛歌」や数々の愛国歌謡を作曲し、インドネシアの歌の父と慕われております。

また、日本では太平洋戦争中にNHKで国民歌謡として紹介されよく唄われた「ブンガワン・ソロ」の作詞作曲家ゲサン氏を世に送り出した作曲家として知られております。

この歌は、藤山一郎や松田トシ、渡辺はまこ、などなどに唄われて、戦時中に、はるかな南の島への憧憬をかきたてました。私もこの歌がラジオから流れてくるのを聴いて「ソロ河」の悠々たる流れを夢見た少年の一人となりました。戦争はどんどん進展し香港を陥落させシンガポール、さらにインドネシアの各諸島へと苦労様ながら大量の兵員殿が送られ、新聞は連日、南の島の記事を満載するようになり、いよいよ以って椰子の葉茂り、波の輝く、南の島を何とか訪ねてみたいと、切望するようになりました。

さて、それから十数年を経てシンガポール、インドネシアを訪れる機会がやってきました。まだ、スカルノ大統領末期時代でしたが、ジャカルタ市内は草ぼうぼう、不景気の真っ最中、建設途中で中断されたビルが剥き出しで、あちこちに目立ちました。それだけに実に自然其のものが悠々と残っており、これぞ光と風の南の島と言う風情に心を打たれました。バンドン会議でその名を知られる山の中腹にあるバンドン市にはオランダが建築した4階建ての全木造作りの庁舎があり、西欧文明アジアとの交流の美しさに感銘を受けました。市内のちよつとしたレストランでは「ブンガワン・ソロ」が、たびたび演奏され、再びその旋律を現地で聴くことが出来た喜びと共に本当に皆に愛されていることを知り、とても嬉しくなりました。

さて、それから再び十数年がたち今度は気がつけばジャカルタの地に住んでいたのです。そして、再びこの「ブンガワン・

ソロ」に出会えました。場所はジャカルタの日本人倶楽部の「ラグラグ」会です。

ラグラグとは歌、もしくは唄うことです。インドネシア諸島には実に多くの民謡や歌曲があり、これらの多くは我々日本人にもすぐ親しめる旋律やリズムがあり、これらの歌曲を全国から集めて、唄おうと言う会です。

山の民謡や子守唄は、日本民謡にそっくり、海の歌はハワイアン調と言った具合です。この会の発足は相当に古く、大先輩たちが、一生懸命に楽譜を集め翻訳し、一冊の歌集として、会報としており、また一旦会員となると、順番に番号を授けられこれは永久番号で、私は晴れて311番となりました。

期待通り、これらの歌は美しい自然を賛美したものが多く、楽しい旋律にあふれ音痴そのものでも、唄っていると、おおらかな気分となり日頃のストレス解消に大に役立ちました。

歌集はすでに90曲近くもあり、この中のイスマイル、マルズキの曲は10曲以上あるのです。この伝統ある「ラグラグ」会は1週1回、日本倶楽部に集まり、マルズキの作曲した「国家賛歌」を先ず歌ってスタートです。

日本人小学校の先生方がピアノを弾きむくつけき男どもが「愛の歌」「子守唄、行進曲」等を熱唱するのです。唄っているうちにすっかりリラックスし、のびのびとなるのです。離任するときは自分の課題曲を唄って卒業です。

さて、それから十数年経ちまして、東京の郊外に落ち着

いた昨今突然、「東京ラグラグ会」に出席するよう葉書が舞い込めました。それは当時JAIICAの行政専門員だった人が住所を探して私に出状したものでした。

東京に帰国した人々たちが継続して「ラグラグ会」を毎年開いていることは、2、3年前の日経新聞の文化欄に大きく記事として掲載されており、承知しておりましたが、今回は有楽町の記者倶楽部で開催することでした。

05年9月の初旬、会場にはバテック（倶梨伽羅もんもんのインドネシアの民族衣装）を着た中老年の紳士諸氏およびこれもレースのロングドレスも鮮やかな淑女がぞろぞろと集い、其の数130名ぐらい、早速私も昔に戻り、311番として入場、久々に小学校の先生を初め先輩、同輩諸氏に挨拶するのに大忙し、またマルズキの歌に出会えました。

「ブンガワン・ソロ」は松田トシのほか菅原洋一やダークダックス、果ては都はるみさんも唄っていたらしいと、聞きました。わたしにとっては遙かかなたの思い出の歌ですが、しかしまた、新しい歌でもあります。日本のカラオケにあるのでしょうか。

余談ながら、ソロ河は中部のジョクジャカルタ市の近く、乾季に訪れると幅の狭い小さな風情でとても歌詞にあるような悠々たるものではありません。ちよつと、がっかりします。雨期におとずれるべきでしょう。同じく戦時国民歌謡として親しまれた「真白き富士のけだかさを」で始まる「愛国の花」の歌

は実はインドネシアではスカルノが作詞した歌としていまだに親しまれています。

聞くところによれば、わが福岡市はアジアとの文化交流に特に力を入れ其の中心的研究機関として、九大内にアジア学術、文科交流専門機関を設置するとか、アジアの次の時代を築く青年たちが集い、新時代の夢を語り合う国際都市、国際学園に発展していくことを心中大いに期待し、応援しております。



73歳で初めての入院手術体験

山田 稔

平成16年10月15日（金）から始まった便秘が18日（月）になっても治まらず、特に16日夜半から17日にかけては、断続的な激痛に襲われ、七転八倒の苦しみにのたうちましました。痛みに耐えられず、18日午後、掛かり付けの内科医院で診察を受けた所、腸閉塞の疑いがあると診断される。

早速、浣腸治療で下腹部の詰まりを排出する事が出来ました。通便の投薬を貰い、排便も回復し、一応、難を脱しました。

しかし、その後も下腹部の痛みは時々起き、10月末、医師より大腸内視鏡検査を受けた方がよいと専門医を紹介される。

翌日、紹介状を持参し荻窪にある大腸専門の医院を訪ね、11月17日（水）の検査予約を入れて貰う。

大腸内視鏡検査は1日3人までで、当日は朝から検査用の薬用飲料水を2・5リットル飲まされ、私の内視鏡検査は午後5時に始まりました。午後6時過ぎに医師より検査結果の説明があり、S状結腸に悪性腫瘍（大腸がん）が確認されたと告げられる。早急に手術を要するとの事でした。ポリープが「がん」にまで進行しているとのことでした。

医師に手術OKの返事をする、阿佐ヶ谷にある河北総合病院の外科部長に直接電話してくれ、翌18日9時30分に直接外科部長の所に来ると指示される。

2時間程外科部長の診察、検査を受け、19日午前10時入院、1週間後の25日（木）に大腸がん切除手術の予定を示される。

平成16年11月19日——73歳で初めての入院手術体験が始まりました。

17日の内視鏡検査以来、飲まず食わずで、入院後は点滴だけの栄養注入のベッド生活です。1日2、3回の各種検査が続く。予定通り、25日15時より大腸がん切除手術の開始。幸い早期がんで他へ転移が認められなかったので、2時間余りの手術で無事終了。S字結腸のがん発生箇所20数cm切除し腸の上下を繋ぎ合わせたそうです。

手術後の経過は良好で、1週間後の12月2日から飲料、翌3日からお粥食事が許される。17日振りの食事です。流動食（重湯）（2日間）から始まり、3分粥（2日間）5分粥（2日間）そして全粥食事へと進んでまいります。



アルバイトに明け暮れた学生生活

渡邊 寛之

食欲旺盛で、朝、昼、晩、3食とも副食物共に平らげました。12月5日(日)点滴が終了し、体に取り付けられていた医療器具が順次取り外され、12月8日には全部なくなり、自由に動き回る自由の身になる。

12月10日夜の回診で、医師より12日(日)には退院してもよいとの内示がある。

入院中、体重は60kgから48kgまで12kgも減少しました。ミイラ同然の骨皮筋衛門です。

12日の退院と自宅療養生活で体重減少に歯止めがはいり、1ヶ月後の今年1月中旬には3kgプラスの51kgになり、2月11日には55kgまで半分強の回復になりました。退院後2週間置きに通院治療を受けています。

12月24日の時、外科部長の許可を貰い、年末年始2泊3日で湯河原の温泉で家族6人で楽しむ。すべて、元通りの生活に戻りつつある事に感謝し、これからは些細な体の不調にも臆病、敏感になって、より長生きに努め、世の中に感謝と奉仕の行いが続けていけるよう頑張りたいと思っています。にくしん会の皆様も呉々もご自愛下さいまして全員一緒に、より長く、飲み、語らい合って参りましょう。

(平成17年2月13日)

昭和26年、旧制高校卒の白線浪人対策として、新制大学学部編入試験が実施された。丁度私も長崎経専卒業生として、経済学部を受験、幸い入学できた。但し、新学制での教養課程での必修課目履修のため、3年間在学となった。

1. 一年目は、香椎神宮から少し奥に入った処にあった小さな炭鉱の総務に勤務していた先輩のすすめで「夜警」の仕事にいた。

一年先輩と二人で一日置きの交替勤務、就業名義は、先づ先輩名義で半年続け、次の半年を小生名義で勤務した。

夏休みには、炭鉱坑内に入り「後引き(あとびき)」という仕事についていた。石炭を掘り出すには「先山(さきやま)」というベテラン坑夫が炭層からうまく石炭を掘り出し、それを後引きが引っ張り出し、トロッコに搬入するのである。真夏の坑内は涼しく快適な作業環境に思われた。

そして一年後「失業保険」を6ヶ月間、6割受け取ることができた。一年間は5割のバイト料(二人で一日置き勤務のため)、後の半年は職業安定所で仕事を探すふりをして6割の失業保険料、本当に有難かった。

2. 次年度は夏の間、中洲のビヤホールでビヤ樽を地下室から

三階の屋上迄運ぶ仕事についていた。一晚に4、5回である。夜帰る時には、サンドウィッチのパンの耳や、ツマミの残りを風呂敷一杯貰って帰った。下宿では腹をすかした友人達が喜んで迎えてくれた。

3. 三年目は、法文系の学生食堂委員の改選があり、立候補、幸い当選することができた。仕事は食堂経営であり、予算決算、女子事務員の採用や、米屋、肉屋、魚屋等仕入先の決定等責任ある仕事であった。

委員皆で、会計係、厨房係、広報係、喫茶係と夫々担当分けをし、結構忙しかった。

一番勉強になったのは、朝、昼、晩の食事量の予測である。ぴったり合った時は高価な肉料理でも十分採算がとれるのである。

予測外れで残るとコスト高になり赤字になるし、不足すると利用者から苦情が出るし食堂経営のむづかしさを経験することが出来た。

学生時代、講義で学んだこと、学友に教わったことは勿論だが、アルバイトで世の中の仕組みや各種保険制度、仕事の計画や予算制度の重要性等身についたことが多かった。

にくしん会会員名簿 (平成 17 年 10 月 1 日現在) 43 名

氏名	学部	出身校	氏名	学部	出身校
安西 彰	29 経済	県立福岡高	寺田憲二	29 法	県立荒尾高
伊岐和男	29 法	県立修猷館高	永山勇大	29 法	旧制熊本語専
岡 哲	29 工	県立明善高	野崎清博	29 法	県立鶴丸高
長 利雄	29 経済	旧制佐賀高文乙	野田宗典	29 法	県立八代高
鬼木正敏	29 法	県立筑紫丘高	野村徳夫	29 法	県立福岡高
川崎 靖	31 法	県立筑紫丘高	林田守生	29 経済	県立済々黌高
吉瀬洋助	29 法	県立浮羽高	半渡大志	29 法	旧制熊本語専
城戸昭良	29 法	県立修猷館高	濱地勝太郎	29 工	県立修猷館高
久保正明	29 経済	西南学院付属高	深田良亮	30 法	県立福岡高
隈 健	29 経済	県立明善高	藤井潤一	29 法	旧制福岡高理甲
古賀一弘	29 経済	県立八女高	藤井 洸	29 工	県立島原高
小尾和徳	29 経済	県立熊本高	藤田佳正	29 理	県立筑紫丘高
甲 禎雄	29 理 31 法	県立筑紫丘高	星子昭磨	29 法	旧制五高
坂口重幸	29 経済	県立大口高	星山芳幸	29 法	県立筑紫丘高
佐藤貞夫	29 法	県立福岡高	松田健三郎	29 工	県立加世田高
境 隆清	29 法	県立三池高	光吉正邦	29 経済	県立筑紫丘高
清水昭俊	29 法	旧制府立高	宮川長行	29 法	早稲田高
下楠園博	29 経済	県立加治木高	村井忠夫	30 経済	県立福岡高
城崎陸郎	29 工	県立修猷館高	山浦可喜	29 経済	県立筑紫丘高
高木一也	29 経済	県立八代高	山田 稔	29 経済	県立八代高
高橋 大	29 法	県立田川高	渡邊寛之	29 経済	長崎経済専門
辻 昌美	29 経済	県立修猷館高			

物故者

毛利芳明 (29 法) 栗田勝彦 (29 経済) 初山泰弘 (31 医)
 倉光信雄 (29 法) 松江光信 (29 法) 山中幸博 (29 法)
 横小路健次 (30 工) 浜村祐一 (29 法)

執筆 7
 校訂 5
 校正 5

あとがき

学部にかかわらず昭和 29 年九大卒およびこれに準ずる人を対象に、にくしん会が発足したのは昭和 53 年 6 月ですが、年 4 回 (3、6、9、12 月) の例会を続け平成 17 年 9 月で 110 回を数えることになりました。現在の会員は 43 名、例会の出席者は多いときで 20 数名、少ないときで 12、3 名です。例会の懇談のなかで、文集を発行しようという声があがり、多くの方の賛同を得て、これを進めることになりました。

編集は、星山 (代表幹事) 伊岐 (幹事) 松田 (幹事) 吉瀬 (会計幹事) さんと川崎 (事務局) の 5 名が相談して行うこととし、具体的な事務処理は松田さんと川崎が担当することになりました。会員の皆さんから事務局の川崎宛に送られてきた原稿を松田さんと川崎が分担してパソコン入力し、取りまとめと出版社との対応は松田さんをお願いしました。43 名全員の方の投稿を希望していたのですが、あいにく体調が悪かったりその他の都合で、結局今回は 32 名の方の投稿に留まりました。

全員古希を超え、仕事をリタイヤした人が殆どで、それだけに人生経験豊かで、多様な興味深い原稿が集まりました。にくしん会の例会はこれからも続いていきますが、この文集がその絆をさらに深めてくれることを確信しております。

(川崎記)

編集委員

伊岐和男

川崎 靖

吉瀬洋助

星山芳幸
(代表幹事)

松田健三郎

(アイウエオ順)

古希を超えて — 九大「にくしん会」記念文集 —

発行日 2006年1月25日

編集・発行 にくしん会

印刷・製本 株式会社 益進社
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-3-2
TEL 03-3262-3471(代) FAX 03(5210)7226
e-mail:info@eishinsya.co.jp

正誤表

十七ページ上段右から十八行目
誤 船橋諄一先生 正 舟橋諄一先生